【研究ノート】

『街道をゆく』データベース作成と同書にみる司馬遼太郎の視点 2：「さ」～「の」

高　橋　光　一

Abstract　In the previous report (Takahashi 2021), the author elaborated the plan of constructing a database on "Going along the Roads" by SHIBA Ryotaro together with a survey on the frequency-distribution of appearance of words with initial letters from "a" to "ko" in the Japanese syllabary.　This is the second report on constructing the data base that includes words from "sa" to "no".　The distribution of frequencies of the whole of the collected words is also presented.　The elements of similarity between the histories of Totsukawa and Switzerland are pointed out.

要旨　前稿（高橋 2021）で，司馬遼太郎『街道をゆく』（以後『街道』）に現れる語彙のデータベース化の計画と，五十音の「あ」行と「か」行に頻出する語彙についての結果を報告した。本稿では，「さ」行 360 語「た」行 324 語「な」行 127 語のうち，出現頻度が高い，あるいは『街道』において特に重要と思われるものを，『街道』での記述に注意しながら提示する。語頭音分布も前回のものに追加する。十津川村とスイスについて，相似に注目した歴史比較を試みる。

目次

1　「さ」～「の」の語彙
2　傾向と解説
3　語頭音の分布
4　十津川村とスイス

1　「さ」～「の」の語彙

分類項目に新たに '領' を用い，地方の律令あるいは封建領地を表すのに用いた。前回同様，特定の地域での伝聞あるいは個人特に司馬の思考を表す語句を " " で囲んだ。また，原則として，筆者による追加事項や筆者の主観的記述には冒頭に "＊" を付けた。

「さ」

済州島〔さいしゅうとう〕**地**　28 耽羅紀行 31 蘭土紀行 II

チェジュド。朝鮮半島南端の先にある火山島で，韓国の済州道を成す。長径 70 km，短径 30 km のほぼ東西に長い長円形。3 人の神が穴から生まれ，島の高氏，梁氏，夫氏の祖となったという神話がある。朝鮮では，『史記』に徐福が不老長寿の薬を求めたという記述がある島であると伝えられている。中央に，韓国最高峰漢拏山（ハルラサン，かんなさん，1,950 m）の火山があり，島の岩質―安山岩・玄武岩―の基を与えている。（＊北西風が典型的カルマ

ン渦を生む。）山地の周囲は広大な平地である。植生が豊かで，半島にはない榧（かや）の木も自生する。昔の耽羅王朝の地。元による高麗侵攻の時，最後まで抵抗した三別抄（さんべつしょう。高麗の強力軍隊）が拠ったところ。モンゴル兵の駐屯地となり長く蒙古馬が放牧された。元の衰亡後も，元兵はこの島に残ったという。16世紀には，朝天を含む6か所に海賊を防ぐための水戦所があった。李朝時代の流人の地で，北側の朝天は李氏朝鮮の党争で配流された人が最初に着いた港である。李承晩政権下の1948年4月3日，4.3蜂起＝4・3事件が起き，約8万人の島民が犠牲になった。済州島人の日本移住の原因にもなったという。盛んな蜜柑栽培は日本からの苗木で始まった。その他，除虫菊，はっか等を産する。山麓では牧畜。風を通す石垣で土地を囲むのはアイルランドと似ている。“秀才と美人の産地”であるのは，李氏朝鮮下で党争に敗れここに流罪となった知識階級が多かったから？　儒教に基づく礼の国であるのは朝鮮半島と変わらない。自然と社会は“三多”と“三無”の2語によって表わされるという。海女の潜水能力は優れている。1970年頃から，火力発電所が稼働し水道が全島に巡らされ，住民は水汲み労働から解放された。＊大戦後，新婚旅行の人気目的地となった。人口約50万。海外に約50万。東京・大阪に約10万。面積1,800平方km。

最澄〔さいちょう〕**人**　1.1湖西のみち 10.1羽州街道 19中国・江南のみち

767-822　称徳女帝の神護景雲元年生まれ。日本における天台宗―草木国土悉皆成仏―の祖。近江の国滋賀の郡（おうみのくにしかのこおり）古市郷出身（今の坂本あたり）。幼名広野。この地には渡来者東漢氏（やまとのあやうじ）が定着していた。（「あや」は韓国の「伽倻（かや）」を示すか。）父は三津首百枝（みつのおびとももえ）。12歳で出家，785年得度，20歳頃，国家昇級試験を受ける。804年，第16回遣唐使団に加わり，空海らとともに入唐し翌年帰国。越州の龍興寺で密教教典を写経したことが後の空海（長安で学び受戒した）との対立の原因となった。旧仏教との戦いの中で『顕戒論』を執筆（820年），天台教学の基礎を確立したが，体系化の前に没した。弟子に義真，円仁がいる。

催馬楽〔さいばら〕**芸**　3.3河内みち

大陸から伝わった楽曲による日本の古代庶民歌謡。大倭，河内，摂津，山背，播磨，淡路，丹波，但馬，近江，若狭，伊勢，美濃，尾張などで広まった。管楽器と笏拍子で伴奏しながら歌う。平安時代に興隆し，雅楽の一つになった。宮廷では箏（そう），笙（しょう），篳篥（ひちりき），琵琶を使う。「石川の　高麗人（こまうど）に　帯を取られて　からき悔いする…」などの歌詞から，楽の要素には朝鮮渡来人がもたらしたものもあるとの推理も可能。＊大陸から伝わったと思われる芸能に歌垣もある。司馬はその原型を朝鮮半島で見た（『街

道 2.24』参照）。

鎖国〔さこく〕**政**　13 壱岐・対馬の道 28.17 耽羅紀行 35 オランダ紀行

人・物の国間の自由な往来・取引きを禁止すること。ふつう明治以降にできた概念とされるが，志筑忠雄の訳書『鎖国論』（1801 年）がある。アジアでは中国，朝鮮が始めた。中国の鎖国は明代の→鄭和（ていわ）大航海以後始まった。朝鮮では釜山に倭館（ウェグァン）があり，対馬藩使節が朝貢の時そこに滞在したが，外部との出入りは禁じられていた。日本では，カトリックのスペイン・ポルトガルを拒否し，清およびプロテスタントのオランダとは長崎の出島での交易を許可した江戸幕府の政策で，実質的には家光（将軍在職 1623-51）の代から始まった。なお，伊達政宗がローマに支倉六右衛門常長（あるいは長経）らを派遣したのは 1613 年である。寛永 10（1633）年の鎖国令では，出国を図った者は死罪と定められた。日本の医学，科学，農業に影響を与えた。なお，対馬の佐須奈港も朝鮮半島と米を貰うための往来に門戸を開いていたが，これは許可制の朱印船（奉書船とも）と合わせ幕府公認だった。鎖国朝鮮側は対馬から銅，錫を得た。しかし，文化交流の域には達していない。朝鮮通信使は儀礼外交が主目的。日本では，欧米露の武力外交により幕末に終了。朝鮮は 1875 年の江華島事件を契機に鎖国を終了させられ，1880 年元山を開港した。＊検閲によって広範な情報の流入を制限することも鎖国の目的である。独裁国家ではいつでも起こりうるし現実に起きている。範囲を狭く限定した検閲は日本でも行われるが，これはふつう鎖国政策とは呼ばない。［参］松田毅一『伊達政宗の遣欧使節』（新人物往来社 1987）

薩摩藩〔さつまはん〕**領**　1.5 長州路 8.4 種子島みち 14.2 南伊予の道

鹿児島藩とも。いまの鹿児島県。島津氏が藩主。豊臣秀吉以前は全九州に影響力があった。関ヶ原の戦いでは西軍に属す。1637 年琉球を属領とする。海運で優れた。江戸期，士族と貧農だけがいて文化を担える富農がいなかった。台風災害と，藩土の大部分が米作に適さないシラス台地でありながら，江戸幕府下では米が貨幣の役割を果たしていたためである。1684 年の人口 35 万人が 1706 年では 46 万人になったのはカライモ＝サツマイモの，ひいてはコロンブスのアメリカ大陸到達のお陰である。1827 年からの藩政改革は成功し，島津斉彬（なりあきら）は洋式軍備を進め，公武合体派の久光の代に倒幕が成った。西南戦争で士族が消滅して，この藩の文化的伝統は途絶えた。ただし，→沈壽官のような士族階級は残った。また，西郷隆盛，大久保利通らが新政府の中での薩摩閥の核となった。江戸期は鎖藩していたが，藩医と兵道（ひょうどう）は藩外留学ができた。

ザビ（ヴィ）エル，フランシスコ〔Xavier,Francisco de Yasu y〕**人**　11.3 肥前の諸街道 22 南蛮のみち I 23.2 南蛮のみち II

1506-1552 スペイン，ピレーネー山脈のバスク地方出身の宣教師。カトリックイエズス会員。日本に初めてキリスト教を伝える。パリに学び，ロヨラらとイエズス会を結成，1537 年司祭となる。ポルトガル王の要請でインドに行き，現地布教に努める。1541 年，リスボン港から 700ﾄﾝの船で東洋に向かい 1549 年（ポルトガル船の種子島漂着から 7 年後），トーレスと共に鹿児島上陸。平戸，山口，京都などで布教活動を行う。豊後大友宗麟を受洗させた。約 2 年後インド，ゴアに戻り，鎖国中の清で布教を企図。広東港外の島で待機中に熱病で死去。死後，法王庁の資格審査を経て聖人に列せられた。イベリア半島ピレネー山脈の麓に，レコンキスタの最中，アラゴン・ナバラ国王アルフォンソ I が建てたザビエルという城がある。F. ザビエルの生家である。バスで 30 分のサングエサ村に Hotel Yamaguchi があった。

「し」

塩〔しお〕**物・食**　11.2 肥前の諸街道 26.29 仙台・石巻

中国にあっては長く国家の専売品だった。よって闇市場が形成される。明の海賊王直も元は塩商人だった。晴天の多い地域では塩田で天日精製する。多くは釜で煮る“蒸釜”法だった。古代は海藻に海水をかけて塩分を濃縮したものを釜の上に載せて焼いた。

自然保護〔しぜんほご〕**普**　11.13 南伊予の道

政治・経済・戦争・遊技などの人為が自然環境に及ぼす影響を極力抑えようとする試みは欧米に伝統的に見られる。いわゆる“サンクチュアリ”や大都市の森林公園はその例である。日本でも，江戸末期に至るまで神社･寺･城はそうした意識の中心にあったという歴史があって，とくに徳川幕府の果たした役割は注目に値する。この点では，現代日本で行政がしばしば示す無知・無理解・無頓着には驚くべきものがある。司馬一行が伊予を訪れたときはちょうど武道館建設計画に伴う“新・宇和島騒動”が持ち上がっていて，司馬は明治初期にあった大久保利通と大阪高師ノ浜のエピソードと対比させた。＊その後“騒動”は決着し，市と愛媛大学が協力しながら城山の環境保全に努めている。自然と歴史が土地の自意識と自負心を高める資産であることに気づいた好例である。

柴田 勝家〔しばたかついえ〕**人**　4.5 北国街道 越前の諸道 18 北国街道 越前の諸道

1522（大永 2）?-1583（天正 11）織田家筆頭家老。信長軍による越前の一向一揆平定後，越前の大名。織田信秀，信勝，信長，秀信に仕えた。1577 年の上杉謙信との戦いで秀吉と

対立。1583 年 4 月の賤ヶ岳の戦いで秀吉に破れる。気象条件が悪い地理的辺境の地にあって，信長死後，近畿を中心に勢力を伸ばしつつあった羽柴秀吉に直ちに対抗できなかった。＊後の豊臣政権 5 大老の一人，上杉景勝の動きにも牽制されていた可能性がある。

シーボルト〔von Siebold, Philipp Franz〕**人**　35 オランダ紀行

1796-1866 医者・博物学者。ドイツ生まれ。一族は医者。1823 年，長崎に医者として着任（『解体新書』から約 50 年後）。日本人患者を診療する傍ら医学と科学を教授し，数十人の日本人弟子を育てた。1828 年シーボルト事件で追放されたが 1859 年再来日。晩年は東インド会社の日本顧問を務めた。娘いねは女医となった。オランダのライデンにシーボルトが持ち帰った多くの日本資料が，またライデン大学に日本研究の課程がある。［著］『日本』『日本動物誌』『日本植物誌』。

島津氏〔しまづし〕**族**　3.2 肥薩のみち 8.4 種子島みち 17 島原・天草の諸道 42 三浦半島記

渡来系の惟宗氏が藤原氏の荘園管理者であったが，後武士化して島津家の祖となった。薩摩藩当主。敗勢の時は風のように退却する。戦国期に，薩摩・大隅・日向を統一し，天草を支配下に置きながら阿蘇氏大友氏を滅ぼし九州の覇者に成長した。関ヶ原の戦いで西軍に与する。逃げ場を失った退却で徳川本陣を突き抜け伊勢に出た。敗戦後，薩摩全土に臨戦態勢を敷き，幕府軍と対峙した。徳川家康を最も恐れさせた外様大名だった。内々の反徳川の姿勢は幕末まで続く。浄土真宗への弾圧は執拗･凄惨を極めた。幕末の藩主斉彬（なりあきら）は開明的で藩の近代化改革を進めた。

シャーマニズム・巫俗〔shamanism〕**宗**　26.19 嵯峨散歩 28.22 耽羅紀行

憑依･脱魂によって神霊と交感し，占い･予言･祭祀を行う習俗。憑依能力がある者をシャーマン，日本ではカンナギと呼ぶ。世界に広く分布する。語源はツングース諸族語にあるとされる。この点において，シベリア，満州，朝鮮半島，済州島，日本列島は同系であると司馬は考える。［参］玄容駿『済州島巫俗の研究』（第一書房 1985）

儒教〔じゅきょう〕**教・学**　8.1 熊野・古座街道 20 中国・蜀のみち 26.211 仙台・石巻 28 耽羅紀行

“仁” と “礼” を重んじる孔子（551BC-479BC）の思想を基づく倫理体系。その学問が儒学。英語では Confucianism。「仁礼知義」を重視し社会秩序の回復を目指す。“鬼神” を遠ざけ “怪力乱神” を語らない合理精神がある。過去の中国，現在までの朝鮮半島に於ける支配的思考原理で，官僚・官衙崇拝の基盤となった。11 世紀から内容に大きな変化が生まれた。特に，

12世紀に生まれた朱子学は日本に絶大な影響を及ぼした。小人と大人・君子（冠をかぶる）を区別する。地位のある者は単純肉体労働をしてはいけない。宋時代以降の新儒教では，四書『大学・中庸・論語・孟子』を重視し，ヤンバン制と鎖国政策の李氏朝鮮を支配した。朝鮮の儒教下では他人に裸を見せてはいけないので，漁師は蔑視されたという。以上によれば“日本人は小人で野蛮”である。中国では，1911年の辛亥革命以降否定されている。日本では，江戸期の藤原惺窩，林羅山らによって興隆を見た。＊科学には肉体労働が伴う。儒教下の中国では権力者は肉体労働を蔑視したことが，科学の誕生が妨げられた原因の一つであろう。日本の封建領主にはそのような観念は一般には無かったようだ。＊江戸期の統治倫理である。「身体髪膚之を父母に受く敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」（孝教）や「忠臣孝子」の語で広く浸潤した。これに，鎌倉期以来の将軍御家人関係の基幹にあった「恩」「滅私奉公」が加わっているのが日本封建倫理の特徴であり，明治政権下の社会に引き継がれた。これらの観念の民間受容には，江戸後期の読本（よみほん）と呼ばれた勧善懲悪の大衆小説も寄与したと思われる。作家には滝沢馬琴，山東京伝らがいた。＊孔子を祀った堂を聖堂あるいは孔子廟という。東京都文京区，栃木県足利市，佐賀県多久市など日本のいくつかの地にある。東京湯島のいわゆる湯島聖堂は林家の私塾を幕府の学問所としたものである。

浄土真宗〔じょうどしんしゅう〕**宗**　3.2肥薩のみち 9.2播州揖保川・室津みち 17島原・天草の諸道 18越前の諸道 21.1芸備の道

親鸞を祖とし蓮如を中興者とする本願寺系の仏教宗派。阿弥陀如来を信仰し「南無阿弥陀仏」を唱え他力往生を期す。肉食妻帯を可とする在家者＝門徒による講組織を信者連携の骨格とする。年貢を集める寺領は持たず信者の寄進によって支えられた。1559年，法王顕如が貧窮にあえぐ天皇家に献金して門跡号を取得，下層民に対する公家の権威を獲得した。中世戦国期に一向宗・門徒宗などと呼ばれ広がった。加賀，三河，伊勢では強力な門徒集団が形成された。一部の武家はこれを恐れこれと戦い抑圧した。信長の石山合戦，島津の念仏停止（ちょうじ）など。ただし，のちに徳川幕府は，血統相続系を西本願寺（豊臣系本願寺派）と東本願寺（徳川系大谷派）に分離し公認した。ここからも薩摩藩の特殊性が分かる。唯円による？『歎異（異端を嘆く）抄』は親鸞の談話集。「怪力乱神」を排するので，門徒の地には民話伝承が少ない。この宗派は拝観料を取ることはない。

縄文時代〔じょうもんじだい〕**史**　38オホーツク街道

旧石器時代から弥生時代の間の時代で約1万年前から約8,000年間続いた。ほぼ，日本列島全域にわたる。草創期，早期，前期，中期，後期，晩期と6区分される。狩猟，漁労，採

集とその加工で食料を得ると考えられてきたが，三内丸山遺跡の調査で，栽培農法も行われていたことが判明した。大陸原産の粟・稗はこの時期に列島にもたらされたらしい。手法として，自然物の簡単な加工による石器や弓矢を用いた。土器が使用されたことから，定住生活をしていたと考えられる。青森県亀ヶ岡遺跡の土器には漆塗りのものがあり，同様の土器は北海道釧路市からも出ている。三内丸山遺跡では，青森県内には存在しないと思われる翡翠を材料にした玉が見つかった。集合竪穴住居を核にして，集団間の広範囲の交流があったらしい。稲作と鉄器に基礎を置く→弥生文化の始まり，あるいは新たな（ツングース系？）北方民族の移入によって終焉を迎えた。

新羅〔しらぎ〕史　1.1 湖西のみち 2.2 新羅の旅 2.3 百済の旅 13 壱岐・対馬の道

シンラ・シラ。中国（北斉）の呼称は楽浪。朝鮮半島に BC1 世紀に始まり，992 年間続いた朝鮮最初の統一国。4 世紀半ばの部族連合国が基礎となった。唐を盟主国とし，官吏に唐服を着用させ，唐への使者には唐風の姓名を名乗らせた。第 29 代武烈王のときに唐と連合して百済を滅ぼす。日本は，斉明･天智帝のときで，白村江の戦いで敗れるが，その後も，相互の遣使によってささやかな関係を保った。遣唐使の安全を保証するためにも新羅との緊張的友好関係は必要だった。8 世紀から渤海国の圧迫を受ける。935 年滅び，王氏高麗に取って代わられた。＊広隆寺弥勒像，東大寺大仏との関連を思わせる仏像が今に残されている。司馬は近江で新羅・高麗の痕跡を感じた。

真言密教〔しんごんみっきょう〕宗　3.3 河内みち 4.1 洛北諸道 26.210 仙台・石巻

真言宗。または真言宗の教義を指す。中国の密教をもとに空海が開いた日本独自の宗教で，『大日経』を主教典，『理趣経』を秘典とする。本山は金剛峰寺。祈ることで，健康，疾病，気象，生死を制御でき，即身成仏できるとした。平安時代には，加持祈祷と合わせて貴族社会に流行した。後の覚鑁（かくばん）による真義真言宗は根来寺を本山とした。＊司馬によれば「空海は矛盾のない論理体系を完成させたため，後継者の多くは師承に務めることしかできなかった」が，覚鑁は例外である。

新撰組〔しんせんぐみ〕組　1.3 甲州街道 33.1 白河・会津のみち 36.2 神田界隈

江戸期末，尊皇派から幕府を守るためにつくられた佐幕派の軍事集団。始まりは，清川八郎の建議による浪士組で京都に駐在。清川が江戸に戻された後，京に残った芹沢鴨，近藤勇，土方歳三らによって結成された。初代隊長芹沢を殺害して近藤勇を隊長とする。京都守護職として京に駐留した松平容保（かたもり）の意に添って市中の警護を務めた。池田屋事件，

禁門の変が関わった主な事件。勝海舟の策に乗り，甲陽鎮撫隊を組織して甲州甲府城に向かう。途中，甲州街道沿いで酒宴を重ねている間に甲府城は板垣退助に抑えられてしまった。甲州勝沼で敗れ，小仏峠を越えて江戸に戻るが，勝の意向を受けて流山を最後の戦いの場とする。

神道〔しんとう〕**宗**　1.2 竹内街道 13 壱岐・対馬の道 27.2 檮原街道 28.23 耽羅紀行 40.29 台湾紀行

霊験あらたかなる神を崇める日本固有の宗教形。卜占の後裔。古神道では，神は森・山に宿るまたは降りるとされ，いわば自然が本殿・拝殿だった。その場所またはその場所を崇める場所を高庭という。人工の建造物は設けない（＊森の民族ゲルマン人を思い出させる）。「神道」の語は日本書紀で最初に用いられた。布留の石上（いそのかみ）神社では，高庭が明治 7 年に時の宮司によって発掘された。出土した宝物は神社で秘蔵されている。平安期以降，死後，人を神として祀ることが行われるようになった。吉田兼倶（かねとも）が 15 世紀の戦国期頃に，平安貴族様式と仏教の加持祈祷の要素を取り込むことで新形式を始め，後衰えたが江戸期，吉川惟足が再興した。明治期に政府神祇官（のち神祇省）による国家神道が生まれ，1936 年に予備役海軍大将小林躋造（せいぞう），内務省総務長官森岡二朗により台湾にも持ち込まれた。＊外来の宗教の影響を受けつつ，吉田神道に加え江戸期末までに多くの流派（両部，伊勢，儒家，垂加，復古，教派などの各神道）が生まれた。明治政府以来の国家神道は制度上 1945 年以降消滅したが，民間の中に「神社本庁」（役所の「庁」を例外的に使用）が宗教法人として存在する。

神仏習合〔しんぶつしゅうごう〕**宗**　8.1 熊野・古座街道

神仏混淆。神信仰と仏信仰を融合させること。神前での読経，神への菩薩号付与などを行う。日本固有（?）の信仰形態で奈良時代に始まる。思想としては本地垂迹（仏・菩薩が日本で神の姿をとったとする）またはその逆の反本地垂迹，形としては神を祀る寺―神宮寺―や神前読経がある。江戸期から明治にかけて神仏の分離運動・政策がとられた。

親鸞〔しんらん〕**人**　16 叡山の諸道 17 島原・天草の諸道 18 越前の諸道 21.1 芸備の道 34.1 大徳寺散歩

1173（承安 3）-1262（弘長 2）浄土真宗開祖。9 歳で出家，29 歳の時法然（ほうねん）に入門。仏教の救済の対象から外されていた猟師農民を相手にした。凡人救済を説く法然集団は宗教・政治迫害を受け，親鸞は越後に流罪となった（1211 年まで）。1234 年京都に戻る。現世利益を否定し阿弥陀如来に頼り救済を願う他力本願を説いた。法然の思想を受け継いで「悪人正機」を説く『歎異抄』は唯円の著とされる。弟子に，加賀で布教活動をした蓮如が

いる。

「す」

菅江 真澄〔すがえますみ〕**人**　25 中国・閩のみち 29.1 秋田県散歩 41.18・26 北のまほろば

1754-1829 三河で生まれ秋田で没した。江戸中後期の国学者・本草学者・漂白的旅行者。本名白井英二。絵が得意だった。長じて頭巾をかぶって生涯を送った。30 歳の頃，信州洗馬村に滞在，村人に古典を講じ和歌を教えた。1784 年より 40 年ほどにわたり東北各地を遊歴し，各地の民生記録を残した。臼の調査は有名。［著］『菅江真澄遊覧記』の「外浜奇勝」の中に，土器の出土についての記事がある。考古学者鈴木克彦はこの記述をもとに発掘し縄文時代の遺跡を見つけた。民俗学の先達として，柳田國男に強い影響を与えた。［画］『百臼之図』

鮨・寿司〔すし〕**食**　9.2 播州揖保川・室津みち

語源は「酸し」。炊いた米は酢で味付けする。大阪で握り鮨が広まったのは関東大震災で少なからぬ東京の鮨職人が大阪に移住したため。鮨種としてのシャコは大阪では好まれなかった。

須田 剋太〔すだこくた〕**人**　3.3 河内みち 7.1 大和・壺坂道 18 越前の諸道 24.2 奈良散歩 31 愛蘭土紀行 II 34.1 大徳寺散歩

1906-1990 埼玉県熊谷生まれ。画工。十代で結核を患い軽井沢で療養生活を送る。芸術大学の受験で 4 回失敗した。浦和で暮らし妙義山に籠もる。戦時中は軍需工場で働く。戦後，奈良薬師寺に住み込む（このとき東大寺の上司海雲，画家杉本健吉，写真家入江泰吉と出会う）。奈良県田原本の農学校で美術講師を勤務。日展で特選。越前の陶芸村でも製作活動をした。なっぱ服と肩掛け黒鞄姿で司馬の『街道』にしばしば同行し数々の話題を提供する人材で，「35 オランダ紀行」まで挿絵を担当した。酒は嗜まず若さは“苦手”（11.3），曹洞禅・道元・梵字・植物に深く惹かれる。会話発音で鼻濁音が混じる（29.1）。泳げない（27.1）。眼鏡枠のデザインも頼まれたが全く売れなかった（18）。大阪府立江之子島文化芸術創造センターが挿絵のインターネット上公開を行っている。司馬は敬愛の心を籠めて「須田画伯」と記す。

スペイン〔Spain〕**地**　22 23.1 南蛮のみち I・II

正式名称はスペイン王国。首都はマドリッド。主に海抜数百メートルの高原からなるイベ

リア半島の大半を占める。降雨は少ない。日本古称で南蛮の一（もう一つはポルトガル）。711 年，西ゴート族をイベリア半島から駆逐したイスラムサラセン人の支配下では科学技術はヨーロッパ諸国を凌駕していた。製紙技術はその一つである。王朝（イベリア半島に支配力を及ぼしたのはアッバース朝 750-1258，ムラービト朝 1056-1147，ムワッヒド朝 1130-1269）の間の抗争によって弱体化，8 世紀初頭に始まる国土回復戦争（→レコンキスタ）期に成立したスペイン統一国家（前身はアラゴン王国とカスティリア王国）が現スペインの基礎となったが，家畜の放牧とも相まって国土が荒廃し，フェリペ III 統治下で断行されたモーロ人（優れた灌漑技術で農業生産を担っていた）追放で農業が衰退した。1492 年，イサベル I はコロンブスの航海計画を支援，アメリカ大陸から収奪した金銀を他国に廻す経済がスペインを支えたが，フェリペ II の時代の破産宣言につながった。スペイン船の土佐への漂着は 1596 年。戦国時代以降の日本にキリスト教，天文学，医学，地理学，軍事によって影響を与えた。伊達政宗が派遣した支倉六右衛門常長（長経）は 1615 年（無敵艦隊敗北後 27 年）にマドリッドでフェリペ III に謁見した。トレドは歴史が凝縮した古都。カタロニアとバスクは自立意識が強い。1936 年に始まった内乱を経て 1975 年に王政復古した。農業を主産業とし，麦，オリーブ，オレンジなどを生産。人口は約 4,500 万人。＊レコンキスタと十字軍との関係については櫻井康人『図説十字軍』（河出書房新社 2019）第 4 章に簡潔な説明がある。イスラム人のイベリア半島への関心は 8 世紀に始まる。E. ギボン『ローマ帝国衰亡史』第 51 章（中野訳，筑摩書房 1992）を参照。＊政宗の遣欧使節はその一部がスペインに留まり帰国しなかったようだ。その子孫が今でも現地に暮らしているという。［参］太田尚樹『支倉常長遣欧使節もうひとつの遺産 その旅路と日本姓スペイン人たち』（山川出版 2013）。＊司馬はザヴィエルによってスペインに導かれた。

「せ」

清少納言〔せいしょうなごん〕**人**　9.4 信州佐久平みち 33.1 白河・会津の道

966?-1025? 歌人。清原元輔（908-990）の娘。藤原一族の最盛期の人。随筆『枕草子』でうかがえる宮廷生活を送り，一条天皇（980-1011）の妻定子に愛された。才気煥発だった。同時代に紫式部（973?-1014?）がいる。＊少納言は令で定められた太政官の役人を意味したが，後に職権は無くなった。

西南戦争〔せいなんせんそう〕**事**　3.2 肥薩のみち 6.1 沖縄・先島への道 25 中国・閩の道

西南の役。佐賀の乱の 3 年後，1877（明治 10）年 3 月 4 日～19 日の明治政府と薩摩藩の戦い。日本最後の内戦。“西郷暗殺計画” に激昂した鹿児島私学校生徒たちの動きが直接の

発端だったという。鹿児島の他，宮崎，延岡等も戦場になった。熊本県田原村の田原坂は主戦場として有名。薩摩軍敗戦の一因は熊本城に拘ったことと司馬は考える。また，この戦争は“民俗学”的には，明・清時代の南方中国における「械闘」と比較できるとも考えた。＊徴兵された政府軍兵士の構成については触れられていない。

世宗〔セジョン：せいそう〕**人**　28.6 耽羅紀行

1397-1450 李氏朝鮮第 4 代国王。太宗の第 4 子。ハングル文字制定（1443 年。この呼称は 20 世紀初頭で，それまでは“ウォンムン”“アムクル”“アヘックル”などと呼ばれた），農書・史書編纂の業績がある。李朝が最も繁栄した時代を創出した。倭寇撃滅のために 1419 年約 10 日間対馬に侵攻（応永の外寇）した。1422 年以降，対馬・日本との交易関係は回復した。

禅〔ぜん〕**宗**　9.2 播州揖保川・室津みち 14.1 南伊予の道 34.1 大徳寺散歩

栄西が宋より伝える。煩悩から離れ自力本願を目指す。日本での主流は曹洞宗と臨済宗。武士道や茶道などの‘道’の根底に禅の思想がある。“禅”をやるから禅坊主は悪くなった。民芸“思想”を看板にするから民芸は悪くなった。禅は天才の道で，凡人には毒である。（以上，司馬の分析。ただし，自説を分析されることは好まないようである［34.1 狂雲集を参照］。）夢窓疎石（1275-1351）については，悟りを得たときの頌「等閒　撃砕す虚空の骨」を取り上げながら紙幅を割いて紹介している（26.16）。

「そ」

宋〔そう〕**史**　19 中国・江南のみち 25 閩のみち

960-1279 中国の王朝国家。唐代と元代の間の期間，日本では藤原氏・平家・源氏の時代に相当。平清盛は対宋貿易で利を得た。この頃，日本-中国（福建）を往来し日本に滞在した中国人の記録が残っている。1127 年，金の圧迫を逃れ江南に移動，これを南宋とよぶ。滅亡の 150 年ほど前，岳飛将軍の頃は軍事的に優位だった。滅亡期，流民が日本に元（げん）の情報をもたらした。ちなみに，元寇は 1274 年と 1281 年。平氏政権以降の日本の貿易相手国で，日本の主輸入品は銭，香料，薬品，陶磁器，輸出品に金，銀，水銀，椎茸があった。銅銭の流出で銅不足になり，1214 年に銅銭による支払い禁止令を出したが，効果がなかった。＊この間，日本はなぜ通貨を自家製造しなかったのか。

孫文〔そんぶん〕**人**　40.4 台湾紀行

1866-1925 広東省生まれ。香港で医学を学び医院を開業すると共に興中会を結社。中国の

近代化に情熱を傾けた。1912 年，中華民国臨時大総統に就任したが，1913 年いわゆる第二革命に失敗，秘書の宋慶齢（妹の美齢は蒋介石の妻）らとともに日本に亡命した。1915 年，宋慶齢と結婚。清朝を倒すことを当面の目標とし，成功したが軍閥政権に対抗しうる勢力をつくることはできなかった。1924 年の第 1 次国共合作を主導。北京で病死。1895 年にも来日。曰く「天下為公」。犬養毅，宮崎滔天（とうてん）らと交流があった。

「た」

大徳寺〔だいとくじ〕**建**　34.1 大徳寺散歩

山号は龍宝山。京都北部, 紫野にある臨済禅宗の寺。開祖は大燈（灯）国師（1282-1337）。赤松則村が造った草庵がありこれが草創と伝えられる。花園・後醍醐帝の庇護のもと拡大発展する。室町時代，政治権力下に入ることを嫌い，堺商人の支援の下，林下の僧門を維持した。応仁の乱で焼壊。一休，沢庵の系譜を持つ。秀吉が信長の葬儀を営んで以降，大徳寺は再興する。重層の山門「金毛閣」は古渓の建立。村田珠光・千利休以来，茶を通じて俗と関わる。現在の仏殿, 法堂（はっとう）は商人, 大名の寄進による。江戸期に 56 の塔頭（たっちゅう）があったが, 明治の廃仏毀釈で現在は 24。山門, 障壁画などの重要文化財が多数あって禅・茶文化を伝えている。訪問者は履き物の脱ぎ方に注意しなければならない。大きさと丹塗りの色でひときわ目を引くのが古渓・利休が建てた山門「金毛閣」である。上層に利休の像を置いたことが秀吉の怒りを買った。司馬のみならず，茶の「侘び」との不調和・乖離に驚く。

太平記〔たいへいき〕**文**　14.3 南伊予の道

南北朝時代の軍記物語。作者不詳（小島法師？玄恵？）。全 40 巻。1370 年頃完成。北条政権崩壊，建武の中興，足利尊氏・楠木正成・新田義貞，後醍醐天皇の動向と死，南北朝時代の終焉までを描写する。公武の抗争を通してこの時代の仏教的正義・死生観を表す。後の講談への影響大。大森彦七と妖怪の挿話が『14 南伊予・土佐の道』に登場する。

平　清盛〔たいらのきよもり〕**人**　9.2 播州揖保川・室津みち 19 中国・江南のみち 42 三浦半島記

1118-1181 平安時代末期，伊勢を基盤とした平家の武士。父は忠盛。保元の乱で崇徳上皇方に勝ち，平治の乱で源義朝に勝ち，政治の実権を握った。1167 年従一位太政大臣。管理した荘園は 500 に達したという。大輪田の湊，博多港，下関港を整え，日宋貿易で富を得た。福原を対宋貿易の基地にした。輸入の主品目に宋銭，輸出品目に金があった。（国際的には金と銅の非等価交換。）貴族化し宮廷の内外に敵を多く持った。反平家の動きは 1180 年の源

頼政挙兵に始まる。司馬は日本の旧来の経済体制を変えようとした人物として描いている（9.2）。

台湾〔たいわん〕**地**　25.20 中国・閩のみち 40 台湾紀行

中華民国の本島。面積約 3 万 6,000 平方 km。（九州は約 4 万 3,000 平方 km。）台湾海峡を挟み中国福建省に対する。首都は台北（たいぺい）。先住民は高山族と呼ばれる。台湾山脈の東西で地理的環境が異なる。旧日本名は高砂国。「塔伽沙谷（たかさご）は唐土東南の海中にあり…」（西川如見『長崎夜話草』1720）。「中華の南にあり。中華を去ること日本の路程七十余里。」（貝原益軒『扶桑記勝』）。唐～明の時代は，中国では流求，小琉球などの名で呼ばれた。オランダ，スペインが西海岸に極東交易の拠点を設けた。明の滅亡期，清の支配が及んだが島民による大きな反抗が 2 度起きた（1721 年，1786 年）。鄭成功によるオランダ駆逐後の対清戦争の拠点もあった。明治政府，琉球国の漂流民 54 人が台湾山地人に殺され，清の無対応から，日本は 1874 年台湾出兵。対抗して 1885 年，清は台湾省とした。1895 年，日清戦争後の下関条約で以後 50 年間日本領となる。日本の台湾経営の基礎は児玉源太郎，後藤新平，新渡戸稲造が築いた。新営は製糖業が盛んだった。1930 年，先住民の武装蜂起「霧社 Wushe 事件」が起きた。現地人の反乱を鎮撫するために乃木希典が旅団長として入台したこともある。1945 年，中国国民党政府軍が入島。国共内戦での敗戦後，大陸から逃亡した国民党政府の全面的統治下に入った。陳儀に代表される本省人抑圧政治のもと 1947 年，二二八事件発生。1952 年日華平和条約。1971 年，国連から脱退，翌年日本と，1979 年，アメリカとも断交。1978 年，蒋経国総統着任。1987 年戒厳令解除。1988 年，李登輝総統着任。官吏公用語は北京官話だが，多くの民族語がある。山地人部族間の公用語は日本語だったという。宗教は道教・キリスト教・仏教が多く信仰されている。20 世紀末の経済発展が著しい。北原白秋は 1934（昭和 4）年，台湾を訪れ『華麗島第一印象』（改造）という文を残している。＊人口約 2,250 万のうち先住民族は 2% とされる。2016 年，民進党総裁が誕生。＊ 2018 年 10 月の外貨準備高は 4,600 億ドル。バレンシアオレンジの栽培法が日本から伝授され成功したのは，気候がカリフォルニアに似ているから。＊ 2019 年末に拡散が始まった COVID19 に対しては，進歩的な IT 応用の行政対策で目覚ましい成果をあげたことで世界の注目を浴びた。＊司馬の最初の台湾行きは 1993 年 1 月。台湾の未来を温かい目で見ていた。［参］伊藤潔『台湾』（中公新書）。

高杉 晋作〔たかすぎしんさく〕**人**　1.5 長州路 21.1 芸備の道 33.1 白河・会津のみち

1839–1867 長州藩士。松下村塾生。過激派志士。先祖は広島県（安芸国）吉田の人。毛利

定広に近侍として仕えた。藩の密命で上海に渡り中国の実情を見聞。イギリス公使館焼き討ちや外国船砲撃をした。奇兵隊その他の兵を集め長州藩守旧派と戦い破り，新藩政権をつくった。奇兵隊を編成したきっかけは，藩の砲台がイギリス軍に占拠されたとき既存の武士は戦わず逃散したことだという。晋作曰く「肉食之士人（美食する武士階級）ら皆事に堪えず」第 1 次長州征伐後，藩内佐幕派をクーデターで駆逐。長州藩を海上封鎖するために周防の大島に停泊中の幕府艦隊を急襲しそれを退散させた。4 月結核で病没。

伊達 政宗〔だてまさむね〕**人**　24 近江散歩 26.21・7・13 仙台・石巻

1567-1636 初代仙台藩主。伊達家第 17 代当主。米沢城主輝宗の長男。幼名梵天丸。1584 年家督を継ぎ，1590 年までに陸奥・出羽を治下においた。織田信長・徳川家康との交誼を保ちつつ奥州平定後関東進出を狙うが豊臣秀吉に阻まれる。母が溺愛する弟小次郎を殺害。1590 年 4 月に始まった秀吉の小田原攻めに遅れて参加，奥州仕置により 1590 年，会津を失う。1591 年から岩出山に治所換え。関ヶ原の戦いでは，家康から領地加増の約を取り付け東軍に与する。岩出山城ののち，仙台青葉山東端に無天守閣の仙台城を（千葉胤道の青葉城を改修して）築く。北上川河川工事（1610-1626），貞山堀掘削（明治まで続く），ローマ使節派遣（1613 年出発，1620 年帰国）など土木・外交の大事業を手がける。領内では，検地，大崎八幡神宮と松島瑞巌寺建造がある。＊使節のローマ派遣は，必要な造船とともに家康の許可を得ている。あるいは，家康との連携事業だった。しかし計画立案の経緯の詳細は不明である。1611 年にキリスト教を許可した政宗が支倉六右衛門常長（長経）を渡欧させるのは 1613 年（この年イギリスが平戸で貿易を開始）から 20 年にかけてで，徳川幕府の直轄領でキリスト教が禁止されるのは 1612 年，鎖国政策が始まるのは家康が死去した 1616 年から。＊政宗の借金は秀吉の朝鮮出兵時に始まった。死後に残した仙台藩の借金は，返済に 50 年ほど要したという。その後，飢饉，参勤交代と江戸住み，幕命普請等で，藩の財政は最後まで改善しなかった。［参］佐々久（編）『改訂郷土史事典 6 宮城県』（昌平社 1982）

耽羅〔たんら〕**史・地**　26.28 仙台・石巻 28 耽羅紀行

たむら。済州島（チェジュド）にあった国の古代呼称。朝鮮半島の神話・史書によれば半島・日本とも交流があった。空海も風浪にあってその島影を見た。（空海『性霊集』）建国神話に 3 人の姫を贈った日本が登場する。『延喜式』に「耽羅アワビ六斤」と出ている。後，→百済の支配下に入った。日本書紀中の「耽羅」の数を司馬が数えたところ 22 だった。

「ち」

茶〔ちゃ〕**食・植**　19 中国・江南のみち 25 閩のみち

① ツバキ科の常緑木。高さは数メートルになる。葉は，タンニン，VC，カフェインを含む。インドから雲南省にかけての地域に原産地がある。江南地方では，龍井（ろんじん，西湖の南西）で良茶を産する。日本には奈良時代に入った。普及するのは鎌倉期以降。宇治などの茶園が多量の良茶を生産し始めるのは江戸期に入ってから。② 茶葉を材料とする飲料。最初の茶書は陸羽（728?～785?）が書いた『茶教』で，茶樹，茶器，製茶，飲み方などが述べてある。日常では，急須（きゅうす・きびしょ，日本）＝茶壺（チャーフ，中国）に入れて飲む。中国の乾燥地帯では，飲み茶は必須の習慣となった。モンゴルでは，圧縮した茶塊を削って他の食材と煮て体内に取り入れる。ベトナム，大阪に伝わった飲み方に，野生の茶の枝を焚き火で焼いてそのまま湯に入れるというのがあった。ヨーロッパへは健康飲料として，日本からオランダを経てイギリスへ伝わった。イギリス，ロシアには紅茶が定着した。③ →茶道。礼と精神性を高める作法を重視する。千利休以降に基本形式が定まった。風流を好めば数寄となり建築・造園に影響を与え今日まで受け継がれている。

茶道〔ちゃどう・さどう〕**芸**　25 中国・閩のみち 29.2 飛騨紀行

茶，茶の湯ともいう。抹茶，煎茶を用いた喫茶をもて成しまたは精神修練の機会と捉える日本固有の芸道であるが，特に断らなければ抹茶道を指す。茶道具として，碗，茶筅，釜，炉，茶杓，棗（なつめ），花，掛け軸，袱紗（ふくさ），扇子，懐紙などが用いられる。鎌倉期に禅僧が中国から持ち帰った天目茶碗を用いていたのが始まりで，室町期 15 世紀初めに商人の間に流行し始めた。貴族・戦国武将の間で種々の理由で重宝され，後，階級性の強い有職故実を重んじる芸として定着した。例えば，“貴人” 点てというものがある。（司馬は漱石『坊ちゃん』の一場面を思い出した。）幾つかの流派があるが，正統の茶では道具立てとそれを鑑る眼力も必要とされ，一般庶民は敬して遠ざける傾向がある。千利休は名人・始祖とされる。織田信長，松永弾正，豊臣秀吉，古田織部など戦国武将も愛し，名器と呼ばれる物を功のあった家臣に与え報償とすることもあった。飛騨には金森宗和がいた。なお，「道」は禅宗と通じる自己修練の型・方法を表すが，中国の道教や日本の神道は別のものとされることが多い。ただ，実際に行われる茶の湯の流儀の背景には様々な要素が絡んでいるようだ。＊表面的な装飾を剥落させると真に貴い精神性が残る。侘び茶によってこれが具現化された。利休が生命と引き替えに守ったとものということもできよう。＊侘び茶は貴族にも愛された。京都市左京区にある曼殊（まんしゅ）院の茶室八窓軒はその一例である。［参］寂庵宗澤『禅茶録』，岡倉天心『茶の本』＊同様に流儀・作法が整った煎茶道は江戸後期に文人墨客の間

で愛され，明治維新以後，貴族･武士階級の没落を期に興隆を見た。西欧列強に日本が加わった中国での収奪競争と表裏の関係にあることは，冨田昇『流転・清朝秘宝』（NHK 出版 2002）に解説がある。

中国〔ちゅうごく〕**地・中国人**〔ちゅうごくじん〕**族**　19 中国・江南のみち 20.1 中国・蜀のみち 20.2 中国・雲南のみち 40.5 台湾紀行

日本文化の源流。多民族の地。日本と日本人を探求する司馬の旅では，中国大陸と朝鮮半島を訪れることは絶対に欠かせなかった。面白いことに，中国で司馬が訪ねたのは北京でも西安でもなかった。彼はまず，中国大陸における現代文明の中心から遠く離れた山岳高地地帯の四川（Sichuan）と雲南（Yunnan）に向かったのである。四川は過去に蜀（Shu）と呼ばれた。長江（Chang Jiang）の上流 1,500 km にある，険しい山に囲まれた地域が四川である。長江の水は浸みて肥沃な米の大地を潤す。とりわけ，そこは劉備（Liu Bei, 161-223）と諸葛亮（Zhu-ge Liang, 181-234）の地である。彼らを含む英雄達の物語三国志演義（*San-guo-zhi yanyi*）は江戸時代から 20 世紀にかけての日本人に愛された。三国志演義の地は鉄で武装された，高度な中国文明の地だった。東の敵対勢力と戦いながら，高地人は 2 世紀に東海岸に達し，劉邦（Liu Bang, 265-195）によって帝国漢（Han）が建てられた。雲南は四川に接している。1956 年，雲南の滇池（Dian chi）の近くで金印が発掘された。印は，1784 年に福岡の志賀島で発見された金印とよく似ている。雲南の昆明（Kunnming）は鄭和（Zheng He, 1371?-1435?）が生まれた地である。彼は，西洋人がインドへの航路を発見する半世紀前，1405 年から 1433 年にかけて，インド・アフリカに至る 7 回の大航海を行っていた。司馬が解きたかったものに蒟蒻をめぐる謎があった。四川までの道すがら，司馬は人々に蒟蒻を知っているかと尋ねたが答えは否だった。最後に四川で蒟蒻の話を耳にしたが実物を見ることはできなかった。蒟蒻が四川から伝わったとしてそれはどのようにしてなのか。なぜ殆どの中国人は蒟蒻を知らないのか，は新しい謎だった。＊漢民族はどこから現れたのか。一説によれば，それは紀元前 1100 年頃の周人と殷人の融合によるという。それでは，周人と殷人の祖はどこからやってきたのか。もしも川が利用できたとすれば，一つはミャンマーから渡口（Dukou）に至る道である。そこから重慶（Chonquing）へは容易であろう。もう一つは北の現モンゴル平原から嘉陵江（Jialing Jiang）に至る道である。ヨーロッパで Würm 氷河期，北アメリカで Wisconsin 氷河期と呼ばれる 100,000-10,000 年前の最後の氷河期の末期では，現在の渓谷も地形的には比較的に移動しやすかったかも知れない。ナウマン象（*Paleoloxodom naumanni*）の化石は，マンモス生存域の南限付近の中国大陸，台湾，日本で見つかっている。それらの化石とともに，旧石器人の骨器も発見されている。ナウマン象は 300,000 年前にア

ジア東端に達していたと思われる。＊須藤は，「カイコ」を表す古日本語とチベット語やレプチャ語の比較から，カイコがヒマラヤ南部アッサム地方からプラマプトラ河を遡って雲南・広東にもたらされた可能性を想像した。石器時代が終わってからであろう。［参］須藤良吉『古代謎の証し 日本民族列島漂着考』（宝文堂 1990），新井小枝子『〈蚕〉を表す語彙―造語法と方言分布―』（高崎経済大学 2017）。

重源〔ちょうげん〕**人**　9.3 高野山みち 19 中国・江南のみち 24.2 奈良散歩

1121-1206 号は俊乗房。もと武士。法然に師事した浄土宗高野聖の一。民間の信望を集めていた。源平の争乱で焼失した奈良東大寺の大仏殿を再建するため，宮廷から「造東大寺勧進職」の地位を与えられ，勧進に精魂を傾けた。民心を集め勧進を遂行するためには恫喝・妖言も用いたらしく，後世の慈円に批判された。東大寺に木像がある。栄西が 28 歳で入宋した時，48 歳の重源に出会ったという。

朝鮮〔ちょうせん〕**地・朝鮮人**〔ちょうせんじん〕**族**　2.1 加羅の旅 2.2 新羅の旅 26.13 嵯峨散歩 28 耽羅紀行

日本でカラ（韓・唐）と呼ばれた地の一つ（もう一つは中国）。朝鮮半島の歴史は，紀元前後，高句麗・四郡（真番郡・臨屯郡・玄菟（とつ）郡・楽浪郡）・三韓が現れた頃に始まる。（倭の邪馬台国は紀元後 3 世紀頃か。）夫婦別姓，父老を尊崇しつつ自我を保つ「礼」の民である。二者が同席するとき，相対的な年齢差を認識することは礼を失しないために重要である。ただし，同年齢の相手に対しては“カプチャン”というくだけ過ぎた関係になる。現代の中に歴史と伝統が息づく地である。司馬は起源を考える。大陸北方からの南下者か。言語はツングース・モンゴル・日本語の系統に属する。古く（百済の頃？）は人名に姓は無かった。満州人は自らを「金」（モンゴル語でアルト，ツングース語でアイシン）と称していた。古代新羅人は自国と自民をシロ（金）と称し，中国文化を取り入れたとき姓を名乗ることを始め，「金」を選んだのではないか。司馬による慶尚道と全羅道の心情的対比は興味深い。＊明治日本が朝鮮半島に積極的に関わりだしたのは 1876 年の日韓江華島条約締結，1884 年の甲申事変の頃からで，1910 年の韓国併合（朝鮮総督府設置）に至った。司馬は，1945 年，彼の属する戦車隊が満州から撤収するときに朝鮮半島を初めて縦断した。

朝鮮王朝〔ちょうせんおうちょう〕**史**　7.4 砂鉄のみち 28 耽羅紀行

1392-1910 古朝鮮のはるか後代，将軍李成桂が高麗王朝を引き継ぐことで朝鮮半島につくられた朱子学による排仏儒教国家。1910 年の日韓併合まで続いた。国名「朝鮮」は明皇帝

から許可され定められた。中国を体面上の儒教宗主とする“尊王攘夷”“小中華思想”の階級社会で，両班（ヤンバン）が中人，常民，賤民（仏僧・巫者・奴婢）を支配する。外交方針は“事大・交隣”。建国後しばらく王族と官僚の対立が続いたが，第4代王世宗（セジョン，せいそう1397-1450）のときに人心の統一が成った。王が革新派，学者が守旧派としての対立があったが，王朝は最盛期を迎えた。ハングル文字が制定されたのはこの時期である。世宗の没後，再び勲旧派・士林派の政争が激化し内政が乱れる。16世紀初頭より対外交易制限政策が始まる。1592-98年の壬辰（じんしん）・丁酉（ていゆう）の倭乱（豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争）で衰退が加速。他方，人民の兵役負担に対する戦後補償によって両班が増えるなど階級変動が起きた。封建体制確立後の300年間は東人派・西人派間の党争が続き政治が混乱した。これが1627年の後金侵攻を招く。日本に活字をもたらしたのは1600年頃である。1636年，後金＝清の攻撃を受け降服し，清との君臣関係が1895年の日清戦争まで続く。江戸時代は，対馬の宗氏との交易及び朝鮮通信使による日本との交流があったが，興宣大院君（1820-1898）の摂政時代は鎖国が徹底された。1876年，日韓江華島条約で鎖国政策を放棄し開国。1894年，東学党農民の反乱（東学党の乱・甲午農民戦争）。鎮圧を目的に清と日本が出兵。1896年，徐載弼（ソ・ジェピル）らによって『独立新聞』発刊（1899年まで）。1897年，国名を大韓帝国とする。日本では，李氏朝鮮と呼ぶ。

長曾我部 元親〔ちょうそがべもとちか〕**人**　14.1 南伊予の道 27.2 檮原街道 32.1 阿波紀行

1539（天文8）-1599（慶長4）1538年生まれか？「一領具足」の制で士卒を集め，1560年土佐を統一し池田の白地に常備軍を置き四国を征服しかかった1585年，秀吉の力に屈した。子盛近の時に関ヶ原の戦いがあった。

沈　寿官〔ちんじゅかん〕**人**　3.2 肥薩のみち 8.4 種子島みち

鹿児島県苗代川の焼き物師の名跡。猪苗代焼きと呼ばれる薩摩焼を伝承する一系統。秀吉の朝鮮出兵の時に島津義弘が連行した朝鮮人技術者の中の製陶部門にいた沈当吉を初代とする沈家の第12代が壽官。1873年のウィーン万博に出品した大花瓶は絶賛を博した。1999年に第15代沈壽官一輝（1959年生まれ）は，種子島で司馬らと酒席を共にした。焼酎を愛する。

「つ」

津軽〔つがる〕**地**　3.1 陸奥のみち 41 北のまほろば

現青森県西半部。古代は蝦夷地として扱われる。稲作伝来前の縄文時代―司馬は“よき時代”という―は狩猟・漁労文化を維持できる実り豊かな土地だったらしい。12世紀，平泉鎮

守府の管轄下におかれる。鎌倉幕府の下では北条氏が地頭。元南部氏の家老が秀吉に運動して独立した藩になった。以後，藩の維持を米作に頼らざるを得ず，農民の辛苦が続くことになった。

津軽 為信〔つがるためのぶ〕**人**　15.6 北海道の諸道 41 北のまほろば

1550（天文 19）-1608（慶長 12）初代弘前藩主。幼名扇。武田重信の子で大浦氏の養子となる。後，南部を自称する。南部晴政の死（1582 年）後の南部家の騒動後，岩手県地方に根拠地をもつ南部家の支配地津軽郡の南部一族を滅ぼし津軽氏となる。結果，津軽氏は主家を離れ津軽地方に実質的に独立した。南部氏に先んじて秀吉の小田原攻めに参陣し，名目上も津軽地方の大名と認知されるようになった。小田原参陣した最北の藩主。1591 年，豊臣により蔵入地代官に任命された。関ヶ原戦では豊臣方。

対馬〔つしま〕**地**　2.1 加羅の旅 13 壱岐・対馬の道

長崎県。面積約 700 平方 km。壱岐と対馬北島を結ぶ線上 200 km に釜山がある。浅茅湾と対馬の東岸を結ぶ陸路が大船越であるが，1672 年に運河ができた（その後，小船越はさびれた）。壱岐と対照的に土地が険しく米作に適さない。魚漁文化の地。『魏志倭人伝』には「始めて一海を渡る千余里。対馬国に至る。…土地は山険しく深林多く…」とある。古事記の国生みに「津島」と記載されている。人の自由往来を妨げる「国家」がなかった古代，朝鮮半島からの鉄の輸入経路にあった。『延喜式』には 29 の神社が登録されている。律令時代は太宰府管轄で阿比留氏が実質統治した。阿比留氏奉納の釣り鐘がある。鎌倉時代に宗氏に替わる。1274 年の蒙古来襲は助国が 2 代目当主の時。江戸時代は津島藩で藩主は宋氏。徳川期の家格は 10 万石相当。海産物を収穫する。朝鮮倭寇の本拠地。1443（嘉吉 3）年，宗氏は世宗（セジョン）に使いを出し，臣従して倭寇を取り締まることを申し出て代わりに米支給の約束を取り付けた。対馬に，朝鮮王に仕える武官の辞令が伝わる。量，島民 7,000 人分を年 20 回の交易船で運んだ。朝鮮との交易のために，この頃釜山付近に公使館「倭館（ウェグァン）」が設けられ，この関係は幕末まで続いた。このことが，1948 年頃李承晩によるによる朝鮮領宣言の“根拠”になった。島の為政者には，食を外国に依存することの危険は感じていたらしい。1861 年，占領を目論んだロシア軍艦の浅茅（あそう）湾侵入と兵舎建築があったがイギリスの協力で撤退させた。明治になり，政府は対馬を通して韓国に「皇上の意志」を伝えて相手を怒らせた。明治海軍は浅茅湾竹敷に水雷艇の基地を置いた。司馬に小説を書くことを勧めた友人青木幸次郎の出身地である。不機嫌タクシーの暴走運転は自他共にこれを認める（＊ 1970 年代のことで仙台や堺など他所でも見られた。）21 世紀には女性ド

ライバーも現れた。高麗王のフビライへの手紙に曰く「対馬…ノ俗頑獷（がんこう），礼儀無ク…」。厳原のホテル内に「あらおどん」（→志賀島）の祠がある。

鶴岡八幡宮〔つるがおかはちまんぐう〕**建**　34.2 中津・宇佐のみち 42 三浦半島記

鎌倉市雪ノ下にある八幡神社。応神天皇･神功皇后を祀る。1603 年の源頼義の勧請による。その子義家は石清水八幡宮で元服し，八幡太郎義家と名乗った。頼朝が本宮と若宮大路からなる現形をつくった。頼朝は，上棟式の席上，大工の為に義経に馬 2 頭を引かせて，義経に対する自己の優位を知らしめた（『吾妻鏡』）。当時，八幡神は宇佐（大分県）に発し清和源氏の氏神となっていた。現在境内に栗鼠が多いのは江ノ島の台湾リスが入ったためという。

「て」

天蚕糸〔てぐす〕**物**　7.3 明石海峡と淡路みち 25 中国・閩のみち 32.1 阿波紀行

テグスサン［中国名楓蚕。学名 Eriogyna pyretorum に対応 ?］という蛾の幼虫（楓を好む）の腺からとった絹糸。絹糸腺を取り出し希酢酸を通して引き伸ばす。釣り糸，外科縫合糸などに用いられる。製法は中国（福建 ?）人による。釣り糸に用いることは江戸中期の阿波の堂浦漁師が始めたらしい。猟師が大坂旅行をしたとき問屋の前に捨ててあった梱包用のものに注目したのが日本での普及の始まりという。宮本常一がこの史実を明らかにした。『宮本常一著作集』（未来社）。当時の天蚕糸に相当するものが徳島県立博物館に保存されている。＊中国人が自分の目で自然を見るときの深さと独創性を示す事例である。紙，火薬，羅針盤が中国で発明されたことはよく知られているが, とりわけ漢字は文明の要素の筆頭にあたる。表意合成文字としての漢字が中国人の分析･総合の力を高める一因となったのかもしれない。外来語を翻訳する場合にはその意味を理解した上での文字の選択が行われる。正しい理解の有無とは無関係に使用を可能にするカナとの違いがここにある。明治期に西欧文明に触れた物理学者長岡半太郎（1865-1950）は，日本人に西欧的科学を行うことができるかという疑問の答を中国文献の中に求め，自信（安心 ?）を得たという。当時の日本人は漢字を自由に使いこなすことができた。

鉄〔てつ〕**物**　6.2 沖縄・先島への道 7.4 砂鉄のみち 18 越前の諸道 21.1 芸備の道 25 中国・閩のみち

鐵。周期律表第 26 番元素。金属。融点 1,535℃。強磁性を示す。酸素と結合して錆びる。先に鉄を持った者が支配者になった。BC1800 年から 600 年続いたヒッタイト王国の存立基盤の一つである。中国では BC1100 年頃に生産が始まった。紀元 280 年頃の『魏志東夷伝』によれば，朝鮮半島では鉄が貨幣のように使われていた。朝鮮半島では紀元前後には製鉄が

盛んで，鉄を持って日本に移入した人々もいたようだが程なく衰微したのは木資源の枯渇によるようだ。ヨーロッパでは，18 世紀に石炭時代が始まり，鉄の精錬，鋳造と鋼鉄の製造法が発明された。鉄の生産と所有は力の源泉であった。錬鉄は鋳鉄よりもつくりやすい。明代の『天工開物』には，錨を鉄を鍛造して製作する様が描かれている。4 世紀以降の鉄器生産は, 3 世紀までの日本における卑弥呼の時代･純石器･木器時代を終わらせ「細戈千足国（くわしほこのちだるくに）」（日本書紀）を建て農工生産を促したが, 別の新たな苦しみが始まった。日本の農家の木製農具は朝鮮のそれに比べ種類が多いが, 鉄器の普及によるものらしい。弥生前期の鉄器は，福岡県，熊本県，鹿児島県，山口県，広島県，兵庫県，大阪府，奈良県で出土している。「福建鉄」という語が江戸期に使われている。中国福建から鉄を輸入することがあったのか，あったとすればその理由は何か。鉄が明治以前の日本を疲弊させなかったのは，木の再生に見合った生産量だったからか。鉄器は人間の欲望を解放する。沖縄人の穏和性は鉄器時代が遅れてやってきたことによるのでは（司馬）。＊ 1960 年代の日本で “鐵は国家なり” という製鉄会社のテレビ広告があった。

天領〔てんりょう〕**制**　8.2 豊後・日田街道 12.1 十津川街道 13 壱岐・対馬の道

① 江戸幕府の直轄領。一般に米の生産性が高い良地であり，最大全 400 万石に達した。ただし, 奈良十津川地方は例外。租税は四公六民が原則。代官が直接支配者。ほかに奈良県, 倉敷, 日田など。他地が幕末に向かい六公四民となった（紀州では八公二民）ことと対照的。今でも，農民が相対的に豊かだった名残を見ることができる。② 天皇領。

「と」

道元〔どうげん〕**人**　11.1 肥前の諸街道 16 叡山の諸道 18 越前の諸道 33.1 白河・会津のみち

1200-1253 禅僧。日本に於ける曹洞宗開祖。源氏藤原の家系に生まれる。天台座主公円のもとで得度，仏法房道元と名乗る。1218 年建仁寺で禅を学ぶ。伝説によると九州東松浦半島から船出し，1223-1227 年に在宋。（南宋を圧迫していた金は 7 年後に滅ぶ。）天童山の如浄のもとで学ぶ。1247 年，越前に移り大仏寺を永平寺と改称する。宗旨は只管打坐（しかんたざ）の実践。弟子に寂円がいる。「末世の愚人，堂閣の結構につかるることなかれ」「愛名は犯禁よりもあし」（『正法眼（げん）蔵』）

統帥権〔とうすいけん〕**政**　8.1 熊野・古座街道 26.17 嵯峨散歩

軍隊の運用を決定できる最高指揮権。文官にある文民統制型と軍人にある軍独裁型がある。日本の明治憲法下ではこの権力は天皇に帰属することになっていたが，1878 年に参謀本部

を設置したときに参謀本部長が直接天皇に助言できる慣習が生まれた。その後，天皇がこの権力を行使する際の助言は軍が内閣から独立してできる（統帥権独立）ことになり，したがって軍が代行という名目で統帥権を実質的に行使できた。第 1 次世界大戦以降，軍における統帥権独立が実現したのは日本だけだった。軍への抵抗勢力を抑圧するための用語「統帥権干犯」が編み出された。（2.26 事件の首謀者の罪状は統帥権干犯だったという。）日本におけるこのような軍権力拡大は，昭和恐慌による社会不安を文民政治が解決できなかったことを原因の一つとした。日本国憲法下では，統帥権は議会選出の内閣総理大臣にある。

東北〔とうほく〕**地**　10.1 羽州街道 26.21 仙台・石巻 29.1 秋田県散歩 33.1・3 白河・会津のみち

歴史的には京都･東京から遠い地。西から見て “広大な奥州五十四郡”“山夷” が跋扈し（空海），“英雄割拠し奸兇巣穴す” るところ（吉田松陰）。寒冷であるが，稲・米が浸潤するまでは “まほろば” だった。陸奥 6 郡を最初に領したのは藤原氏で 1083 年以降。江戸期以降，山形，秋田は上方文化の，宮城は江戸・東京の影響を大きく受けた。岩手は独自性を保つ。青森は？有名人のサンプルとして陸羯南，原敬，高橋是清，狩野こう吉，内藤湖南を挙げた（29.1）。司馬によれば「東北は単独で偉大である」「東北人（東北の文人のことか）には “東北は東ではない” という “力み・自虐性・幻想” がある」（33.3）。姓は佐藤，遠藤が多い。＊（33.3）でのタクシー運転手の話は暗示的だった。日本人には古代から現代に至るまで伝統的に都風を貴しとする都指向があることは司馬が指摘していたことである。この性癖が日本人の地域性を特徴づける。

徳川 家康〔とくがわいえやす〕**人**　1.5 長州路 8.2 豊後・日田街道 9.4 信州佐久平みち 16.10 叡山の諸道 41.25 北のまほろば 43 濃尾参州記

1543（天文 11）-1616（元和 2）徳川政権の創立者で初代江戸幕府将軍。三河岡崎生まれ。先祖は一遍時宗の念仏聖の徳阿弥で松平郷に滞留したとき松平家の娘と懇意になり子を成し，代を重ねて家康に至った。浄土宗信徒。幼名竹千代。幼少期，織田家と今川家の人質として駿府で暮らすが，桶狭間の戦い以後岡崎に帰る。織田信長と和睦後，63 年家康と改名。この年，家康が真宗寺内町の不入特権を侵したことで三河一向一揆を惹起したが翌年これを平定。84 年小牧・長久手で羽柴秀吉と戦う。90 年秀吉の小田原攻めの後，関東に移封（いほう），250 万石を領した。秀吉の死後，その妻ねねに近づき，秀吉の息が掛かった加藤清正らを見方にし，1600 年，関ヶ原の戦いで勝利し，江戸に幕府を開き，征夷大将軍となる。豊臣家と接近した公家・天皇を一般社会から隔絶し，武家を男系血族の原理で，経済を農民の原理によって支配体制をつくった。この点で秀吉と対照的である。秀吉と近かった後養成

天皇を 41 歳で退位させた。勇気と小気がほどよく混在した人（司馬）。＊徳川政権は，2 代目秀忠までは太平洋の果てまでの関心を持っていたが，3 代目家光以降は内向きである。国内的には，江戸の周囲に頑健な橋の建設を許さず，大量輸送を可能にする道路の建設と車両の開発も行わなかった。1721 年に江戸城下に出された「新規御法度」では，“呉服物，諸道具，書物…諸商売物，菓子類にても，新規に巧出し候事自今以後堅く停止”“古来の通にて事済み候処，近年色品を替，物数寄に仕出し候類は追て吟味を遂げ停止” された。海上輸送では，2 本柱以上のあるいは 500 石を超える船の建造を認めなかった。（ただし，500 石以上の船を初めて没収したのは家康で 1609 年である。この造船禁止令が正式に解かれたのは 1853 年で，洋式軍艦の製造に直ちに着手したのは，幕府の他に，水戸藩，薩摩藩，仙台藩があった。また林子平の『海国兵談』の再販が認められたのは 1856 年。）対外的には，家康の死後 20 年で，徳川幕府は本格的な鎖国政策をとることとなった。政権の根底に “冒険” を嫌う，一貫した “小気” があった。ただし，江戸期末期に開国に動いたのは幕府で，朝廷は攘夷を主張した。［参］佐々久（編）『改訂郷土史事典 6 宮城県』（昌平社 1982）

土地〔とち〕物・経　8.2 豊後・日田街道 9.1 潟のみち 35 オランダ紀行 36.1 本所深川散歩

広辞苑によれば，大地，土壌，耕地，宅地，地方，領土の意。現代日本では，自由な所有・売買・投機・贈与の対象となり，結果課税の対象になる “不動産” の一種で，江戸期までの日本人の経済観と倫理観を根底から変質させた原因である（8.2）。結果，国土をゴミだめのようにした（35）。私有地なら持ち主は何をしても良いという不思議な病気にも取り憑かれた（35）。司馬は，農民意識（または根性）の延長線上にあるこの制度が日本社会の（文化的）品位を下落せしめているとみるらしい。鳥屋野潟は，彼のそのような考察に豊富な材料を与えたようだ。震災後の東京の再生計画が後藤新平によって立てられたが頓挫したのもこの土地問題の故である。直接の誘因は，農業の工業への身売り政策がもたらした経済精神の荒廃である。ただし，これが日本特有の現象ではないとすれば良くないこととは言えないかも，と自信無さげである。＊司馬が土地問題に切り込む視点と迫力は注意を払うに値する。尻すぼみ的であったのは，資本主義の世界的潮流には抗えないという諦念，あるいは “商品” 経済を善とする立ち位置にあるようだ。

十津川〔とつかわ〕地　12 十津川街道 15.21 北海道の諸道

奈良県南部，十津川の中・下流域にある日本最大面積（672 平方 km）の村。産業は林業。特産は椎茸・わさび。南朝の遺臣が定住したといわれている。村民は武士階級を称し十津川郷士と呼ばれた。世情隔絶の地で政権の支配が及びにくく長く実質的な “共和制” をとり，

豊臣期の検地が公権力が正式に及んだ最初の出来事。公租は免じられ，この措置は江戸幕府にも受け継がれた。労役として筏役があった。僻遠の地であるが，都に変事（壬申の乱・平治の乱）があると兵力を強者に提供した。義務ではなく郷を守るためである。1863 年の天誅組の乱では十津川郷士は翻弄された。江戸期より外部から入郷した志士が多数いるがその多くが非業の死を遂げている。文武館は孝明天皇肝いりで造られた教育施設。郷士は戊辰戦争の功で士族となる。1889（明治 22）年 8 月の豪雨で村は壊滅し，生き残った 2,600 人は北海道移住を決意した。（北海道新十津川村はこのときにつくられた。現在は町で，人口は約 7,600。）昔，この地の人は「野猿」という索道にぶら下がり谷を移動したという。“十津川街道” は明治 40 年の着工から 50 年を要して完成した。五條方面からは，天辻峠・阪本・辻堂を経る（R168）。現在，道の駅，12 軒の旅館・ホテルがある。生活施設の「谷瀬の吊り橋」は観光資源で，遊具の野猿もある。森林地帯の村役場がコンクリート・合板造りであるのは法規制によるか？

豊臣 秀吉〔とよとみひでよし〕人　1.5 長州路 15.1 松前へ 16.10 叡山の諸道 27.2 檮原街道 32.1 阿波紀行 43 濃尾参州記

1537（天文 6）-1598（慶長 3）幼名日吉丸。『太閤記』によれば，少年時に蜂須賀小六と出会ったことが歴史に名を残す端緒であった。織田信長に仕え，徳川家康と同盟し天下を平定した。1583 年大坂城完成。財政基盤を海外貿易に置いた。司馬によれば商人の親方（ただし，一家の会計収支には言及無し）。旧農奴解放を行い，全国的な市を大坂で立て，商品経済の基盤をつくった。世の頂点に立つために足利将軍に近づこうとしたが断られ，古い公家・天皇の権威を用いた。（時の天皇は後養成で 18 歳の時聚楽第で秀吉以下の武家と対面した。）源･平･藤原・橘の四姓に頼らず，新姓「豊臣」を案出した。有力な係累，代々の家臣を全く持たない孤独な権力者だった。大坂城で死去。＊検地と刀狩りを行い，兵農分離に基づく徳川封建社会の基礎をつくった意義は大きい。

「な」

夏目 漱石〔なつめそうせき〕人　26.15 嵯峨散歩 29.1 秋田県散歩 30.5 愛蘭土紀行 I 36.2 神田界隈 37 本郷界隈

1867-1916 明治-大正期の小説家，文明批評家。本名金之助。森鴎外，樋口一葉と同時代の人。幼少期に夏目家の書生だった塩原―『道草』では島田として登場―の養子になる。漢詩に才能を発揮した。神田の錦華小学校に通った。14 歳から 16 歳まで二松学舎に，その後成立学舎で英語を学ぶ。18 歳で大学予備門に合格。29 歳で松山中学校に英語教師として赴任。

1903 年，文学研究に打ち込んだ 3 年間の“不愉快な”イギリス留学（この間のアイルランド人クレイグ先生，化学者池田菊苗との出会いが，ある影響を漱石に及ぼしたと司馬は思う）から帰国。1907 年朝日新聞社入社。前年 9 月まで本郷に住んだ。落語を愛した。最初の小説は 39 歳のときの『吾輩は猫である』。文学をものしようとした小説家。新聞の大衆文芸普及機能と現代に直接通じる文章語を確立した。

奈良〔なら〕**地**　1.2 竹内街道 24.2 奈良散歩

①〔県〕近畿地方の中央にある山と盆地の県。かつての大和の国で，飛鳥京，藤原京，平城京が置かれた。唐の長安へのあこがれが生んだ都市だった。南北朝時代の吉野朝の所在地でもある。江戸期は小藩，寺社領があった。1971 年の司馬の言によれば「日本でもっとも汚らしい県の一つ」になってしまった。東大寺，興福寺一帯の鳥瞰景には日本でも希な大スケールの歴史的統一感があり，後に，“駘蕩”としていて，古い木造建築を維持している“大いなるまちである”という表現を加えた(24.2)。歌人前川佐美雄によれば“低血圧が風土病”。②〔市〕奈良県の庁在地。司馬は，奈良は長安の面影をまだ宿していると信じていたようだ。司馬たちは，飲み屋への行き帰りに国の至宝の傍を何気なく歩く贅沢を味わった。＊司馬たちは，大和の一部に理想を失った政治と経済がつくる醜怪を見たが，長い時間だけが生み出すことのできる生きた調和に包まれる至福も味わうこともできた。「たかが飲み屋にゆく道行きの途中が，これほど贅沢な景観であるというのは，何に感謝していいのだろう」（司馬）。

南蛮〔なんばん〕**古・族・地**　11.3 肥前の諸街道 22 南蛮のみち I 23.1 南蛮のみち II 35 オランダ紀行

南方地方［シャム，ジャワ，ルソンなど］の総称。または，ポルトガル，スペインに代表される異国，異人とその文化。鉄砲，武具，服飾，食物，宗教等で戦国時代以降の日本に大きな影響を与えた。日本人にとっては，ポルトガル（+スペイン）流とカトリック切支丹の意。科学，医学の伝授に貢献した。明治期に北原白秋，木下杢太郎ら一部の文人の懐古的憧憬の対象になった。→紅毛　＊ヨーロッパ文明が異社会を滅ぼす要因に病原菌の移入があるというのは J. ダイアモンドの指摘であるが，日本（梅毒はポルトガル人による？）にそれが当てはまらないのは，日本の統治状態によるのか，あるいは南蛮人の日本到着が医学の発達の後だったからか。

南部〔なんぶ〕**地**　3.1 陸奥のみち 29.1 秋田県散歩 41 北のまほろば

鉄瓶，漆器，馬の産地。鎌倉期，甲斐の国（山梨県）巨摩郡南部村の住人が八戸付近に移住して拓き南部家の祖先となったという伝説がある。このときの従者の姓に，桜庭・三上・神・

岩間･原があった。司馬は, 日本で冒険的征服があった唯一の例であろうと考えている。(『遠野物語』([口語訳] 河出書房 2013) では, 北畠顕家に従って 1333 年陸奥入りした甲斐源氏を遠祖とする南部家の一門が 1627 年八戸から遠野に移封された。) 一戸, 三戸, 八戸がある。遠野は十戸に由来するというのは郷土史家小井川潤次郎の説。ちなみに, 小井川の姓は甲州に同じ地名がある。各地の南部家間に争いがあったが, 三戸の南部信直が豊臣秀吉から南部の支配を認められた。江戸初期に盛岡に南部家の城が完成し, 盛岡が南部全体の首都となる。1664 年に南部家の当主が死去したが, 後継者がなく, 幕府の命令により八戸藩を新規につくることで改易を免れた。戊辰戦争時に奥羽列藩同盟に従った南部藩が秋田藩と戦った (1868 年の鹿角大館戦)。明治に, 八戸は津軽藩主体の青森県に組み込まれた。ちなみに, 南部衆と津軽衆は江戸期から近代まで仲が悪いという印象がある。

南北朝〔なんぼくちょう〕**史**　4.1 洛北諸道 32.1 阿波紀行 33.1 白川・会津のみち

南北朝時代に対立して存在した 2 朝廷。分裂・合体・内乱と “美学を欠いた欲得の時代” の象徴語。足利尊氏の入洛で, 建武新政 (史書『梅松論』によって「延喜・天暦のむかしに立ち帰りて」と讃えられた) に失敗した後醍醐天皇が光厳皇太子への譲位を嫌い三種の神器を持って吉野に出奔し, 京に光明天皇, 吉野に後醍醐天皇が並存したことに始まる。1392 年, 後亀山天皇から後小松天皇に三種の神器が渡され合体が成立した。北畠親房の『神皇正統記』, 江戸期の水戸史観に見られる南朝, 北朝の正当性の議論-北朝方を “賊” とし, 南朝方を “勤王” と分類する-は明治まで続いた。

「に」

ニコライ〔Nicholas of Japan〕**人**　15.4・12 北海道の諸道 26.214 仙台・石巻 36.2 神田界隈

1836-1912 本名イオアン･ディミトロヴィチ･カサーツキン。ロシア, スモレンスク生まれ。ロシア正教の大主教。ゴローニンの著作に触発され, 高田屋嘉平の写真を持って 1861 年領事館付き司祭として函館に。1871 年東京にロシア語学校を設立。東京駿河台のニコライ堂を建立 (1884 年起工, 1891 年完成)。伝道と新約聖書翻訳などに従事した。日本に関する報告「キリスト教宣教団の観点から見た日本」を『ロシア報知 (1869 年)』に寄稿し, その中で日本の歴史と明治維新の現況を伝えた。徳川慶喜を高く評価していた。

日本〔にほん・にっぽん〕**地**　17 島原・天草の諸道 18 越前の諸道 24 近江散歩 25 中国・閩のみち 40 台湾紀行

かつて「倭国」(多少蔑みの意味が込められた呼称)「ジパング」(憧れの意味も込められ

た呼称 ?）と呼ばれた，アジア大陸東端に日本海を挟んで面する弧状列島と周辺島嶼の国。東に太平洋，西に日本海，北に樺太を越えてオホーツク海，南西に東シナ海を見る。文明は江戸期まで常に西方から伝わった。長く米が統治原理だった。マルコ・ポーロによって西方世界に伝聞され，1543 年，ポルトガル人によって「発見」された。アントニオ・ガルワンの『世界発見記』，フェルナン・メンデス・ピントの『東洋遍歴記』によってさらに人々の知るところとなった。1945 年のポツダム宣言により，主権が及ぶ範囲を「本州，九州，四国，北海道，および連合国が決める諸島」とされた。長く遮寒なき耐寒文化の国だった。これは伝統的→日本家屋の構造に表れる。“ゴミ箱をひっくり返したような” 無秩序な景観は，失われた「美」と「文明」に触れたいという願望を有料の博物館・美術館でかなえるシステムを生み出した。＊都市はすべからく博物館・美術館を有することになっている。起程は大英博物館で，1759 年開館はイギリスそして世界の風景を一変させることになる産業革命に先んじること 20 年，彼らの先見の明を表すか。ルーブル美術館開館は 1793 年である。日本では，東京国立博物館（前身は「文部省博物館」）の 1872 年，東京都美術館（前身は東京府美術館）の 1926 年が最初である。＊歴史においては，大海流に挟まれた火山地帯という弧状列島の立地条件により，地形特に海岸線は常に変化していることを考慮する必要がある。資源は環境と人。環境破壊という消費と低賃金労働という浪費によりいずれも乏しくなりつつあるようにみえる。

日本語〔にほんご〕語　26.15 嵯峨散歩 26.214 仙台・石巻 38 オホーツク街道 39.13 ニューヨーク散歩

音声としては，主として，ユーラシア大陸の東端，北太平洋の西に存在する弧状列島の住人が用いる，あるいは理解できる言語。琉球語，アイヌ語は含めない。現形の祖は弥生時代の始まりと共に生まれ広まった。単語は中国大陸の言語が取り入れられ，文法は朝鮮半島のそれ―ウラル･アルタイル系―との類似が認められる（例えば「ある」と「持つ」を区別する）。主語（または「主格」）が多様である，主語を省くことができる，敬語がある等の特徴がある。多くの方言がある。文字としては，中国大陸で用いられた表意文字の「漢字」と，そこから派生した表音文字としての「かな」の 2 種，明治以降に導入されたローマ字が用いられる。音声言語を重視するヨーロッパ言語学の影響を受け，完全ローマ字化運動が起きたこともある。日本人によって国語 = 言語制度としての国語，標準語としての日本語が意識されたのは，主として攘夷を放棄し近代中央集権国家の建設を目指した明治になってから，また植民地・占領地政策の必要性からだった。→「おとうさん」「おかあさん」は明治政府によって工夫された官製語。分野領域によらない統一的文体が確立したのは夏目漱石以降である。発音には大きな地域差が認められる。官制日本語では，奈良時代以降 6 母音が 5 母音になり，第二

次大戦後，GHQの指示でローマ字が日本式からヘボン式に変更されるなど，時代が下るほど音素とその組み合わせが単純化される傾向がある。豊富な漢字使用とあいまって同音異義語が多い。司馬には「（江戸末期までは）日本人は音声会話を重んじない」と見えた。［参］谷崎潤一郎『現代口語文の欠点について』（世界教養全集6，平凡社）イ・ヨンスク『「国語」という思想』（岩波），田中克彦『言語学者が語る漢字文明論』（講談社）＊日本語に対する司馬の印象は，インターネットを介したSNSの普及によってさらに強化されるのではないか。

日本人〔にほんじん〕**族**　7.4 砂鉄のみち 9.4 信州佐久平みち 12.1 十津川街道 14.5 南伊予の道 15.10 北海道の諸道 19 中国・江南のみち 20 蜀のみち 21.1 芸備の道 24 近江散歩 30 愛蘭土紀行 I 28.23 耽羅紀行 31.2 愛蘭土紀行 II 40.13 台湾紀行 41.31 北のまほろば

旧新石器人（日本列島が大陸から分離し現在の位置に落ち着き始めるのは数百万年前。大陸と接近していたため，現東南アジア・モンゴル方面からの移動もあったかも知れない），縄文人，弥生人を経，アイヌ・琉球人を取り込んで現代人に至る。遺伝的には蒙古系民族に由来するとする見方がある（加藤晋平）ほかに，中国雲南・江南系あるいはアルタイ系を祖とするという説がある。司馬は，南方系民族である越人の渡来を考えた。最新の遺伝学的研究では，縄文期以前に北アジアからの移入があり，その後の弥生期に朝鮮半島からの移入があったと考えられている（中岡他2014および引用文献）。中国・朝鮮の規範「同姓は娶らず」が無く，近縁結婚を排除しない。稲作によって低地を好む“水辺の民”である。その闘争性は，非技術民の水利争いに根ざしているかも知れない。航海術に優れた民族の流入も考えられるが，江戸期の鎖国制度のために海洋民族にはなれなかった。官庁を低地に置くことも日本人の特徴だと司馬は考える。好奇心が強い，あるいは「奇人・変人が多い」（ある韓国人の印象）。下北の寺田徳穂も縄文人のように翡翠に穴をあけて喜ぶ。“奇妙”で“異様”な清潔好き（司馬）。＊庶民の“勉強好き”は江戸期に定着。2018年時点で，高等教育機関進学率は82%，平均寿命は84才。昭和まで続く“猛々しさ”は鉄器によって形成されたのではないか（司馬）。宗教的寛容は，国分寺と神祇官が併存した奈良時代に始まるか。他方，中央・都市崇拝の傾向が強い。古来，森・杜を神聖な場所として守り，物事の調和を大切にしてきたが，この点については，明治以降ひたすら下品・がさつになって現代に至っているようである。美については，私有できるもののみに強い関心を持つようになったことと関係があるかもしれない。司馬によれば，日本人を日本人たらしめる倫理感情があった：もののあわれ（源氏物語に代表される），名こそ惜しけれ（板東武者に代表される），明治の悲しみ（夏目漱石に代表される）の3つである。＊環状列石の遺構がヨーロッパから東アジア，日本列島中東北部に残る（甲

元 2003）ことは，北アジアからの民族の移入があったという説を補強するのだろうか（須藤 1990）。＊日本人は海洋民族ではないが，ある猟師（安曇族の末裔か）の海洋冒険譚は，機会を奪われさえしなければ海洋民族たりえたことを示唆する（宮本 1973）。＊ベネディクト，R.『菊と刀』は 1945 年以前の日本人に関する研究の古典である。ベネディクトは，「日本人」の行動を ‘恩’‘孝’‘義理’‘忠’‘恥’ の概念で特徴づけることを試みた。これは，現在でも使用に耐える観察研究の準拠系である。

人間〔にんげん〕**動**　32.1 阿波街道 38 オホーツク街道 40.18 台湾紀行

司馬が語る人間はもちろん社会性動物としての人間である。素裸では赤くも青くもない。身分･権威･栄誉を色で感じる（32.1）。衆を恃み大に属する者は傲り少数者をバカにする（38）。一個の中に子供と大人を共存させる。子供の精神が芸術と科学を生み，大人の精神が儒教を生む。（40, 18）

「ね」

ネフスキー，ニコライ〔Nevskii, Nikolai Aleksandrovich〕**人**　6.3 沖縄・先島への道 38 オホーツク街道

1892-1945 ロシアの日本学者，西夏学者。帝政下のペテルブルグで東洋学を学んだ後日本に留学。柳田国男，折口信夫らと親交を持った。日本各地を旅行し日本研究を行った。ロシア革命（1917 年）の 2 年後, 小樽高商のロシア語教師。22 年, 北海道出身の万谷イソと結婚。1929 年に帰国。レニングラード大学日本学科教授となるが，1937 年に妻と共に逮捕される。死亡地は不明であるがレニングラードで処刑されたともいう。1957 年に名誉回復された。

「の」

能因法師〔のういんほうし〕**人**　26.24 仙台・石巻 33.1 白河・会津のみち

988-1058? 下級役人橘氏の次男で後に出家, 摂津古曽部に住む。26 歳頃出家。藤原長能（ながよし）に歌道を学び, 歌道界で交流を広げた。1025 年以降東北を 2 度旅した。“漂白の歌作”は西行にも影響を与えたという。「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞふく白川の関」。和歌集『玄々集』＊能因の収入源は何か。

乃木 希典〔のぎまれすけ〕**人**　33.2 赤坂散歩 40 台湾紀行

1849-1912 長府藩（現山口県の豊浦郡府中）の六本木江戸藩邸に生まれ 10 歳までそこに住んだ。15 歳の時，吉田松陰を教育した玉木文之進に師事。23 歳陸軍少佐。6 年後西南戦

争に従軍。翌年，歩兵第一連隊長，旅団長・師団長として日清戦争に参加。1904 年の日露戦争時に招集され旅順攻略の指揮をとる。明治天皇（1852-1912）の死後，静子夫人とともに殉死した。遺言で邸跡は東京市に寄付された。

2　傾向と解説

本稿では，「さ」「た」「な」の各行を扱った。「日本」の歴史に最も深く関わった地域「中国」「朝鮮」「南蛮」がここに登場する。中国人が発明した漢字を朝鮮人が直接日本人に教えた。歴史のある段階では，文字の有無が民族の将来を左右する要因になる。日本人が南蛮の，後には紅毛の進んだ文明を吸収できたのも，文字を知っていたからだった。古中国と古朝鮮の果たした日本史上の役割は計り知れない。司馬がこの 2 地域に注意を向けるのは極々自然のことだった。

『街道』においては，宗教・教義に関連する項目が目立つ。面白いことに，「さ」行だけで「最澄」「ザビエル」「儒教」「浄土真宗」「真言密教」「神道」「親鸞」「禅」と多くの重要語が集録される。司馬自身が古神道（明治以降の国家神道と対置される），浄土思想，親鸞が “好き” だということが反映しているのだろう。前稿（高橋 2021）で見たように「米」も信仰の対象となることがあった。統治の要諦は人心の安定にあり，宗教が国（家）と相即不離の関係にあった時代が地域を問わず長く続いたことを思い出させる。司馬の関心は，現代の日本政治における「信仰」を考える際の出発点となる。

『街道』は紀行文であるが，人物の比重が非常に大きい。「さ」～「の」では 20 人の人物が計 67 カ所で取り上げられている。その回数が最も多いのは，司馬の紀行に同行した画家須田剋克太を除くと豊臣秀吉，親鸞，徳川家康である。大衆に最も強く作用する政治・軍事と宗教を，2 つの対照項目に注目して分析するのは，視点の偏りに対する予防策として有効かも知れない。その中で，時代を創るという点において傑出したものに司馬は特に魅力を見出すようだ。同時代ではないが「空海」と「親鸞」，同時代の「豊臣秀吉」と「徳川家康」がそれぞれその 2 項にあたる。前者は官・富と民・貧の対比，後者は華・短と慮・長の対比と図案化できようか。本稿では江戸幕府初代将軍「徳川家康」を採録し最後の将軍「徳川慶喜」は取り上げないが，『街道』の司馬はもちろんそのような片手落ちは見せない。「1.3 甲州街道」の中で『街道』にふさわしい充実した取り上げ方をしているのである。

「日本」「日本人」は，人類学者・歴史学者らの汲み尽くせない研究対象である。『街道』の最も多くの節でも，最も重要な主題「日本人とは何か」に直接関連する話題が取り上げられている。司馬の生涯をかけての探究対象だった。「日本人」の語に対する示唆に富む言及

は少なくとも 13 カ所で認められる。人類学的に分かっている最も古い日本人の祖は旧石器人で，その後の縄文人に続く。日本人の系譜を辿る研究は，21 世紀の現在遺伝学の成果を駆使して進展中である。「日本」という国家が誕生する遙か以前の話を含むので，そのような研究の方法から，日本列島人という語が使われることがある。最新の研究によれば，アフリカ大陸人と日本列島人の遺伝的距離は遠いが，朝鮮半島人と日本列島人（の少なくとも一部）は極めて近い。司馬は，独自の文化を生み維持した日本列島人としての蝦夷・アイヌ・オホーツク人の存在にも注意を向けている。

司馬は，「東北」への思いを抱き続けてきたという。それは，平安朝歌人や俳人松尾芭蕉によって惹起されたのだろう。青森県の亀ヶ岡遺跡が示すように，東北は長く縄文文化の地であった。“米を手にした弥生人の後裔が日本列島を支配下に置くまでは青森は「まほろば」であったのではないか” という司馬の期待は，縄文社会の三内丸山遺跡の発掘でさらに確固としたものになったようだ。縄文文化（あるいは文明）の研究は現在進展中である。しかし，そもそも縄文人が何処からどのようにしてやってきたのか，そして何処へ消えたのかは依然謎である。

江戸期の「鎖国」政策は，日本列島を日本人の特質を際だたせる実験の場とした。日本人の海外渡航は禁じられ，船の航行能力を著しく制限され，東南アジアに形成された日本人村は衰微し，日本人が海洋民となる機会が閉ざされたのである。海外からの情報は，平戸が閉ざされてからは公式には長崎出島を経由してのみ入手できることとなった。この時期に江戸文化が花開いたのは，出島での海外交易で流出した大量の金に負うという司馬の指摘は，一般読者の盲点を衝いて面白い。

この間，宮本常一が指摘したように，為政者の思惑とは裏腹に外国の地を踏んだ日本人がいたことは知っておくべきだろう。それは遭難による漂流民である。記録に残る最も早い時期の外国接触者は，1702 年にピョートル大帝に引見した大阪の水夫伝兵衛だった。ロシアはこのとき日本語学校を開設し，伝兵衛はその教師になったのである。その後の遭難者で日本に帰国できたものは貴重な海外情報の提供者となった。

史家司馬が最も愛するまちの一つが奈良である。単に過去を保存しているだけではなく，千数百年の時間だけが造ることのできる美と歴史の重みの中に何気ない日常が展開されているところに，このまちとそこに住む人々の精神の偉大さを感じ取ったようだ。読者は，履歴を無視し破壊するところから，地域の価値ある自己は生まれないという歴史思想を感じ取ることができる。ところで，中国にも朝鮮にも無い日本独特の建築様式の五重塔は，誰がどのようにして考え出したのか，という大きな疑問がある。司馬はその答を見つけることができなかった。上田篤（編）『五重塔はなぜ倒れないか』（新潮社 1996）に，中国・朝鮮・日本

の仏塔の違いが詳しい。

司馬の独特な問いの一つに “都会人の傘好きは何に由来するのか” がある。傘という人工物は都会にこそ似合うと思うのだが，台風接近時のテレビ報道がめくれあがった傘を支えきれずにずぶ濡れになる都会人を映し出すのを常とするのを思い出すと，司馬の問いもむべなるかなである。都会人は，人工物がもたらす仮の安全性の中で無防備となることを象徴しているのかも知れない。同時に，古代都市ポンペイの終末を思い出させる。

3　語頭音の分布

司馬の関心と日本語の特徴をおおまかに炙り出すために，前稿で「あ」から「こ」までの語頭音の分布を調べた。ここで,「さ」～「の」を加えた分布を図 1 に示す。全体的なパターンは,「し」の突出まで含めて辞書とほぼ同型である。「さ」の凹みとその周辺はどちらかというと古語の分布に近い。「た」「と」がやや突出しているのは,「平」「徳川」という同族の人名がかたまって現れる,「高橋」のような頻度の高い姓が現れる，命名一般に「大」が好まれるという, 日本語と日本史の特殊事情による。全体的な傾向として母音の “u” と “e”（すなわち「う」「え」「く」「け」「す」「せ」「つ」「て」「ぬ」「ね」）の頻度が小さい傾向がある。「は」行以降でどのようになるかは興味の湧くところである。

4　十津川村とスイス

前稿（高橋 2021）で統計的手法に触れた J. ダイアモンドの著作に言及した（ダイアモンド 2012）。これは，標本数が多い場合は分野に限らず特に有効である。歴史は繰り返しのな

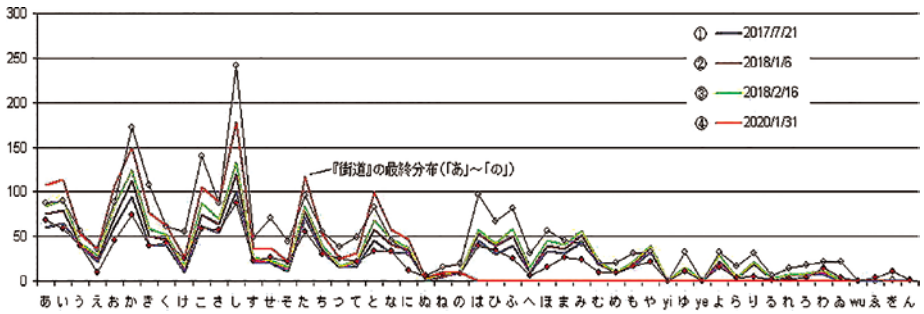

図 1　現代語（白抜き丸（○），『言泉』）と古語（塗りつぶし丸（●），『古語辞典』）のページ数による語頭音分布。『街道』から最終的に採取されたものは語彙の実数を赤の太い実線（④－）で示す（「さ」から「の」までが今回新たに付け加えられた部分）。太い実線の色 ①～④ は採集時期の違いを表す。どの音についても ① ≤ ② ≤ ③ ≤ ④ である。

い個別事象の連なりで十分な標本数は必ずしも保証できないのであるが，個別事象間の類似性に着目し異なる事象に共通する要因を探し出すことは意味があることだろう。ここでは，司馬が注目した奈良県十津川村の歴史をスイスのそれと比較してみる。

十津川は僻村だった。しかし，幕末から明治にかけての動乱の時期に有名無名の多くの志士が関わった地で，司馬が歴史作家としての関心を向けることに何の不自然さもない。特に注目しているのが，朝廷貴族や封建領主による支配を経験せず，結果的に村の自治を保ってきたことである。司馬は“共和制”の概念でこの事情を捉えようとしていることは前稿（高橋 2021）で触れた。日本史の中から世界にあるいは現代に通じる意味を探ろうとするのが司馬の歴史を見る姿勢である。

十津川村は険しい山に囲まれて稀有な歴史を重ねた。十津川の地理・歴史データを簡単に整理しておく。

・面積は 670 km^2 で現在日本最大の村である。人口は 3,200，人口密度 4.7 km^{-2}。

・紀伊山地または吉野山地の中央部に位置し，東に八剣岳 1,915 m，南に冷水山 1,262 m，西に護摩壇山 1,372 m を望む。いわゆる奥吉野の一部をなす。

・峠：野迫川村との境界に三浦峠，十津川と村境の交点から北に 10 km に天辻峠。

・十津川（中流から熊野川と呼ばれ新宮に至る）が村の中央を南流する。多くの支流がある。

・平均最高気温は 31℃（8 月），平均最低気温は－0.4℃（1 月）である。多雨である。

・言語は奥吉野方言[1] で，表吉野など周辺地域との違いがある。

住人の起源は不明である[2]。平安時代から文書に現れる。租税免除の歴史があり自治意識が高い。勤皇の意識が強い。村を守るための郷士出兵があった。事例を挙げると，壬申の乱（672 年）では吉野の大海人皇子側につき，平治の乱（1159 年）でも出兵した（と『保元物語』『源平盛衰記』などをもとにいわれるようだが筆者は詳細を知らない）。南北朝時代も吉野側に従った。大坂の役では徳川側で，戦後その功により武士と同等の「郷士」となる。幕末の天誅組の乱では討幕派の首謀者に翻弄された。

上のような十津川の歴史は，筆者にスイスを連想させる。スイス（ラテン語で Confoeder-

---

[1] 十津川方言は，国語研究者平山輝男（1909-2005）によって採集記録されている。金田一春彦記念図書館アーカイブを参照。

[2] 720 年に成立した『日本書紀』の「応神記」に，天皇が吉野で“国樔（くず）人”から酒，歌，舞の供応を受けたという記述がある。百済の王仁が日本に諸典籍をもたらした 3 年後のことである。それによれば“国樔人”は京の東南の山を隔てた，“峯高く谷深い”吉野川の畔に住んでいたが，表吉野まで出ることもあった。［参］宇治谷剛孟『全現代語訳 日本書紀（上）』（講談社学術文庫 1988）。十津川郷士はその子孫であると司馬は考えている。

atio Helvetica）の基礎データを以下に記しておく。

・面積　41,000 km^2　人口　790 万　密度 190 km^{-2}

・山：南にヨーロッパアルプス，西にジュラ山脈

・川：ライン川，ローヌ川

・峠：フルカ，シンプロン，ザンクト・ゴッハルト，グリムゼル，ゲンミ

・平均最高気温

　チューリッヒ 24℃（7 月）　ツェルマット 19℃（7 月）

・平均最低気温

　チューリッヒ－4℃（1 月）　ツェルマット－8℃（1 月）

・言語：スイスドイツ語，フランス語，イタリア語，レトロマン語

・独立諸邦の同盟軍がオーストリア・フランス・修道院との戦いで自治を守る。傭兵出兵の機会が多かった。

1815　ウィーン会議で永世中立承認

2002　国際連合加盟

E. ギボン の『ローマ帝国衰亡史』（中野訳 1976）第 1, 2 章によれば, スイス地域で古代ローマ帝国の直接の統治下にあったのは，だいたい北部にある現在のバーゼルとそこに繋がる低地までのようだ。この地は，紀元前のカエサルの時代にローマ帝国の経済圏に組み込まれ，紀元 360 年頃，ユリアヌス帝によって要塞化された。しかし，統治は実質的にライン川･ローヌ川に沿ったスイスの線状地域（前者は延長すると下流のドイツ領ボッパルトを経てオランダ領クレーヴェまで及ぶ）とそこから南西のジュネーブ，アルプスに至る河川と湖の周辺に限られたようだ。ドナウ川流域の平原地帯とは全く条件が異なるベルン・チューリッヒ線から南のアルプス地帯では，ローマ帝国軍といえども地理を知り尽くした「蛮族」と対等に戦うことは困難ではなかったか[3]。主部族であったヘルウェティ族が BC58 年にカエサルの軍に敗れたのは，彼らが非戦闘員 10 万人を伴ってガリアを移動中のときだった。農業生産性の低い山岳地帯の住人については, これを苦労して支配する利点はそれほどあるとは思えない。

帝国軍がスイスを撤退した 400 年以後は，この地域は頻繁に外部からの侵略を受けたが，スイス地域内の諸王国は，神聖ローマ帝国皇帝との関係を保ちつつ，政治・軍事的には被支配と独立を繰り返した。宗教的には，キリスト教に帰依してからは宗教的首長に忠誠を示し修道院の支配を受けることもあったが，封建君主が育つ前にアルプスの峠（図 2 参照）と街

[3] スイスについてではないが，ギボンは小アジア・タウルス山系におけるイサウリア人の活動とローマ帝国との関係を，山岳地形の特質を考慮しながら記述している。ギボン（1776），p 323 参照。

図２　十津川村（昭文社『日本地図帳』より）。赤ピンは三浦峠。

道が開通し農牧民の経済的地位が向上したことが彼らの自治意識と階級意識を高め[4]，その後の盟約者団[5]の形成を促した。

中世以降のスイスの歴史は傭兵と切り離せない。評価は 15 世紀以降確立した。ヨーロッパが戦場となったとき，ヨーロッパ王家や貴族のために直接血を流すのはスイス傭兵であることもあった。経済問題とも絡んでいるが，スイス諸邦を直接戦火に曝されることから守るという結果をもたらした。中世フランスのコミューンとも共通している部分がある。当時のヨーロッパ世界で高い信用を得ていて，現在もバチカンの衛兵はスイス傭兵である。

スイスの上の情況と日本の十津川村とのある程度の―すなわち粗視化による―類似性を指摘しておく。既に述べたように，また司馬遼太郎が『街道』で注目したように，奈良県十津川村は古来深山僻隅の地で明治期まで米はほとんど生産しない。このことで，長期にわたって統治中枢の課税支配から免れ，自治的な地域共同体の形成・維持を可能にした。南北朝時代に吉野朝の支持基盤であったが，それ以前から朝廷との精神的結びつきが強く，古代の中

[4] 踊共二『図説スイスの歴史』（河出書房 2011）によれば，自らを下級貴族と見なしていたらしい。
[5] 州の連合からなるスイスは，そもそもの始まりはベルン，ルツェルン，シュヴィーツ，チューリッヒなどいくつかの独立都市の集合体だった。これらの都市を盟約者として，安全保障のために相互協力の協定を結ぶことで盟約者団 Eidgenossenschaft が形成された。1291 年に永久同盟を協約したウーリ（ザンクト・ゴットハルト峠の北），シュヴィーツ（ウーリの北），ウンターヴァルデン（ウーリの西）は原初三邦と呼ばれる。以後，盟約者団の増加・拡大が始まった。

図 3　スイス概要図（スイス政府観光局）。青色ピンがザンクト・ゴッハルト峠。

央政治の混乱時には村民が出兵し，幕末には天皇家の直轄領となることを申し出てもいる。戊辰戦争には御親兵として参加した。敢えて単純化していえば，政治的には十津川村は幕末まで日本国内のスイスだった。十津川村を直接変えたのは現代の道路と橋だったが，スイスアルプスでは，強固な独立精神が培われて以後に外部との交通網が四通八達した。これが二者の大きな違い（の一つ）であろう。

生物学の概念に相似（analogy, convergent）というものがある。発生学的には起源が異なるが機能的に似た器官同士の関係を表すものである[6]。ここでは，詳細を無視した粗視化によって見えてくる人間社会の相似関係を，十津川村とスイスの歴史の中に認められることを示唆した。

参考文献／資料

ギボン，E. 1776（中野好夫訳）『ローマ帝国衰亡史 I』（筑摩書房，1976）

甲元眞之 2003『東アジア巨石文化の広がり』青驪 **9** 1-11.（熊本大学学術リポジトリ：https://core.ac.uk/download/pdf/57734145.pdf）

須藤良吉 1990『古代謎の証し 日本民族列島漂着考』（宝文堂）

ダイアモンド，J. 1997（倉骨訳）『銃・病原菌・鉄』（草思社，2012）

高橋光一 2021『『街道をゆく』データベース作成と同書にみる司馬遼太郎の視点 1：「あ」〜「こ」』東北学院大学教養学部論集 **186**, 133-151.（https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2021/pdf/liberalarts186_04.pdf）

中岡博史，細道一善，光永滋樹，猪子英俊，井ノ上逸郎 2014『HLA 遺伝子多型からみた日本人集団の混合的起源』*MHC*，**21** 37-44.（https://www.jstage.jst.go.jp/article/mhc/21/1/21_37/_article/-char/ja/）

中田祝夫編 1986『新選　古語辞典』（小学館）

[6] 文化人類学でいう，A. ゴールデンワイザー達のいわゆる「可能性制限の原理 principle of limited possibilities」と対応するようだ。ただ，なぜ「原理」と呼ばれるのか，これが一般にどのように評価されているのかについて，筆者は不案内である。

林大編 1986『国語大辞典　言泉』（小学館）
宮本常一 1973『海ゆかば』*energy*（エッソスタンダード）**10**, no.1 p54.

訂正

東北学院大額教養学部論集　第 186 号

『街道をゆく』データベース作成と同書にみる司馬遼太郎の視点 1 :「あ」〜「こ」

p 137 下から 1 行目 :（誤）藩民　→　（正）旧藩士達